

**2003年度
活動報告書**

The Liberal Arts

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

2003年度 活動報告書

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

はじめに

教養研究センター所長 羽田 功

慶應義塾大学教養研究センターはまもなく開所3年目を迎えようとしています。

2002年度の活動報告書にも記したとおり、教養研究センターは慶應義塾のあるべき教養教育について、「教養」そのものを軸に据えながら、多角的な調査・研究や具体的なプログラムの立案、提言を行い、あるいは実験的な試みによってこれらを検証することを目的とした研究機関です。教養研究センターがはじめて一年間を通して活動を展開した最初の年度である2003年度、教養研究センターではこの目的をより明確に意識したさまざまな活動が展開されました。もちろんそこには、特定研究として最終年度を前に成果の集約に向けていよいよ活発な様相を見せつつある学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクトや多くの応募があった一般研究プロジェクト、あるいは長年の実績を誇るHAPPによる「新入生歓迎行事」の実施や学生・教職員企画の支援、極東証券寄附公開講座や港北区民講座の企画・運営など、すでにお馴染みの活動も含まれています。と同時に、いくつかの新しい活動も開始されました。主なものは以下の通りです。

第一に挙げられるのが、教養研究センター設置の実験授業「スタディ・スキルズ」を開講したことです。教養研究センターは、大学とりわけ学士課程における教養教育の役割を、学生たちが大学という学びの場のみならず、卒業後の長い人生においても「よりよく学び」、「よりよく生きる」ことができるための基盤作りにあると考えています。そのための出発点ともなる「学びの作法・技法」を習得することを直接的な目的とした授業が「スタディ・スキルズ」です。しかも、ただ技術に限定することなく、大学を支える知の世界の広がりを経験し、これを習得した作法・技法と結び付けることでより深い浸透をはかるために、総合教育科目「身体／感覚 文化」および極東証券寄附公開講座「生命の魅惑と恐怖」という講座とセット履修の形式を取りました。幸い履修者の評判もよく、2004年度からは正規のカリキュラムに組み込まれることが認められました。

第二は、教養研究センターの基幹活動とも言うべき基盤研究が本格的にスタートしたことです。慶應義塾における教養教育の現状把握から始まり、長所・短所の検討を経て、新しい教養教育モデルの提言を目指してハイピッチで調査・研究活動を展開中です。

第三は、教養研究センター所員・研究員の研究活動を活性化させるための一助として、現在所員・研究員が携わっている研究について学生や一般向けにわかりやすく解説した小冊子シリーズ「教養研究センター選書 (Mundus Scientiae)」の刊行を始めたことです。このシリーズがわが国の教養・教養教育に大きな刺激を与えることのできる存在へと成長することを期待しています。

さて、教養研究センターの活動の全体像や個々の詳細については本文に譲るとして、今後、塾内外との連携を強化していくことが教養研究センターにとって大きな課題となると思います。主体的な活動を中心に置きつつ、それをいかにして教養教育の新たな形へと発展する幅広い動きにつなげていくか。そうした意味におけるリエゾン機能の開発を目指して次のステップへ踏み出したいと考えます。皆様のご理解・ご協力をお願いいたします。

目 次

. はじめに	03
. 2003 年度活動報告	
1. 教養研究センター運営委員会	06
2. コーディネート・オフィス	
研究企画ボード	08
研究推進セクション	12
交流・連携セクション	13
広報・発信セクション	14
日吉行事企画委員会 (HAPP)	16
極東証券寄附講座運営委員会	18
港北区民講座運営委員会	20
3. 研究活動	
第3回シンポジウム「自然科学系を核とした教養教育の将来」	21
第4回シンポジウム「身体知を核とした教養教育の将来」	22
基盤研究	23
特定研究	25
一般研究	38
. 資料編	
1. 港北区民講座 受講者アンケート結果	46
2. 教養研究センター規程	47
3. 教養研究センター運営委員会委員	49
4. 教養研究センターコーディネート・オフィス	51
5. 教養研究センター所員・研究員	52
6. 2003 年度の主な活動記録	54
. 終わりに	55

教養研究センター運営委員会

運営委員会はセンター担当常任理事、大学各学部長、各学部日吉主任、センター所長・副所長などによって構成され、センターの運営の基本方針や事業計画、予算・人事等、重要事項を審議する委員会である。2003年度は、9月27日(土)と3月12日(金)に来往舎において開催された。

第1回運営委員会

議事に先立ち、黒田昌裕常任理事より、「教養研究センターの今後の活動に期待する」旨の挨拶があった。

引き続き、羽田所長より、「9月26日開催の大学評議会において羽田功君がセンター所長を重任することが決定した(任期1年)」旨の報告があった。また、2003年度前期活動として、「2002年度活動報告書を発刊したこと」「基盤研究について、10月以降具体的なプログラムを立ち上げる予定であること」「特定研究の学術フロンティア『超表象デジタル研究センタープロジェクト』は、現在11プロジェクトが活動していること」「一般研究プログラムでは、研究成果を教養教育に還元するという基準によって採択された9プロジェクトが活動していること」「HAPPは日吉キャンパスと連携して、入学歓迎行事などを実施したこと」「港北区民講座として、秋に『DNAの抽出とナイロンの合成』をテーマにした親子実験教室の企画を検討中であること」が報告された。また、研究企画ボードから、「前記学術フロンティア『超表象デジタル研究センター』の中核である『リベラルアーツ教育の総合モデル構築』プロジェクトが実施しているスタディ・スキルズという実験授業を、将来的にはセンター設置科目としたい」「センター所員の研究成果を学生や社会人向けにわかりやすくまとめるというコンセプトで制作するセンターブックレットの原稿を所員から募集している」などが報告された。研究推進セクションからは、「FDセミナーを始めとして、各種勉強会を開催している」旨の報告があった。

続いて審議事項に入り、センター副所長について、下村裕君(法学部教授)(新任)、近藤明彦君(体育研究所教授)(重任)、熊倉敬聡君(理工学部助教授)(新任)の3名が選出された。いずれも、任期は2003年10月1日から2004年9月30日までの1年間である。また、所員と兼任研究員の退任・就任についても承認された。最後に、学生研究員制度の内規について、案通りに承認され、運営委員会は閉会した。

議題

報告事項

1. 所長人事について
2. 「2002年度活動報告書」について
3. 2003年度前期活動報告

審議事項

1. 人事について

- 1) 副所長人事
- 2) 所員・兼任研究員

2. 学生研究員制度について

配布資料

2003年度学術フロンティアプロジェクト研究者リスト(特定研究)

2003年度教養研究センタープロジェクト研究者リスト(一般研究)

実験授業「スタディ・スキルズ」

2003年度HAPP

2003年度港北区民講座

2003年度極東証券寄附公開講座

「教養研究センターブックレット応募要領」

各種勉強会のお知らせ

「大学教養研究センター副所長の選任について(案)」

「大学教養研究センター所員」「大学教養研究センター兼任研究員」

「慶應義塾大学教養研究センター学生研究員に関する内規(案)」

第2回運営委員会

議事に先立ち、黒田昌裕常任理事より、挨拶があった。

続いて、所長代行である下村副所長より、「2003年度第1回運営委員会において承認された内規に基づき、学生研究員第1号の申請があり、受理したこと」の報告がなされた。続いて、2003年度後期分の活動内容について、各担当から報告があった。研究企画ボードからは、「他大学調査の一環として、ソウル大学へ所員を派遣したこと」「12月に『身体知を核とした教養教育の将来』をテーマとして、シンポジウムを開催した」「教養研究センターブックレットについて、『教養研究センター選書』という名称に変更して、制作中であること」などが報告された。広報・発信セクションからは、「ニューズレターの第3号、『身体知を核とした教養教

育の将来』シンポジウム報告書を発行した」旨の報告がなされた。交流・連携セクションからは、「『国際学生懇談会 in Hiyoshi』を開催したこと」の報告があった。HAPPからは、秋の公募企画についての報告があり、今後の活動方針についても説明があった。港北区民講座運営委員会からは、「港北区より、横浜市の予算削減のため、継続が困難という連絡があり、来年度以降、講座は開催しないこととした」旨の報告があった。極東証券寄付公開講座運営委員会から、「『生命の魅惑と恐怖』というテーマで公開講座を実施したこと、この講座と連動させた実験授業を行ったこと」が報告された。このほか、基盤研究、特定研究、一般研究それぞれの進捗状況の報告があった。

続いて、審議事項として、2004年度活動計画案と予算案が議論され、承認された。

所員と兼任研究員の人事について報告があり、承認された。授業（設置講座）化を計画している極東証券寄付講座の講師の手当てについて審議がなされ、案通りに承認された。

制作中の教養研究センター選書の販売についても、案の通りに承認され、閉会した。

議題

報告事項

1. 教養研究センター人事（学生研究員）について
2. 2003年度後期活動報告

審議事項

1. 2004年度活動計画（案）および、予算（案）について
2. 2004年度センター所員・兼任研究員について
3. 極東証券寄付講座について
4. 「教養研究センター選書」の販売について
5. その他

配布資料

「2003年度の主な活動記録」

2004年度一般研究プロジェクト

2004年度活動計画（案）（2004年度HAPP活動

含む）

2004年度センター予算（案）

2004年度所員・兼任研究員リスト（2003年度追加分含む）

「教養研究センター設置講座 極東証券寄附講座」

「教養研究センター選書の販売について」

慶應義塾大学教養研究センターの運営にあたってはコーディネート・オフィスが運営の実務業務を担っているが、その中核をなす組織が研究企画ボードである。以下に研究企画ボードの役割と2003年度に研究企画ボードが中心となって企画・運営を行った主な事業について報告する。

1. 研究企画ボードと各セクション並びに各委員会との関係について

教養研究センターにはセンター運営の実務業務を担うコーディネート・オフィスが置かれているが、コーディネート・オフィスのメンバーはセンター所員および職員の中から委嘱されたコーディネーターによって構成されている。また、コーディネート・オフィスには研究企画ボードを中心として研究推進セクション、交流・連携セクション、広報・発信セクションが設置されている。さらに日吉行事企画委員会（HAPP：Hiyoshi Art and Performance Project）、極東証券寄附講座運営委員会、港北区民講座運営委員会が研究企画ボードとの密接な連携のもとで活動を展開している。

中核となる研究企画ボードはセンター所長、3名の副所長、センター事務長、センター所員・職員の中から委嘱された14名のコーディネーターの計19名で構成されている。その役割は調査・研究活動の企画・運営・支援および統括、研究資金などの導入、内外諸機関との交流・連携の促進、その他センターが主体的に進めるさまざまな事業の母体としての機能を果たすことにある。同時に上記の各セクション、各委員会との連携を保ちつつ、センター全体の運営のバランスをはかる調整機能も併せ持っている。

各セクションの責任者には3名の副所長があたり、研究企画ボードと連絡を取りつつ活動を行っている。研究推進セクションではセンターの調査・研究活動の円滑な進展を支えるための活動と共に研究・教育の基盤の再構築を目指したFDを中心とした啓蒙活動を担当している。交流・連携セクションでは義塾内外に向けた行事の企画・運営、内外機関との交流・連携の促進のための活動を担っている。広報・発信セクションはセンターの活動報告書、シンポジウムなどの報告書、「ニューズレター」、「センター・レポート」などの編集・発行、センター刊行物の企画・発行などを行っている。

詳細は各セクションからの報告を、また、HAPP、極東証券寄附講座運営委員会、港北区民講座運営委員会の活動についても下記の記述と共に、各委員会からの報告を参照されたい。

2. 2003年度の主な事業

1) 教養研究センター主催シンポジウムの開催

・第3回シンポジウム

2003年7月4日（金）に「自然科学系を核とした教養教育の将来」をテーマに第3回シンポジウムを企画・開催した。教養教育における自然科学系教育の重要性と問題点、今後に望まれる方向性などについて生物学、化学、物理学、数学、心理学領域からの興味深い実践的な報告が行われ、その後フロアからの発言を交えて活発な議論が行われた。参加者は約50名であった。

・第4回シンポジウム

2003年11月26日（水）に「身体知を核とした教養教育の将来」をテーマに第4回シンポジウムを企画・開催した。教養教育にとって身体知は必要かという根本的な問いを基底に置きつつ、普通部、慶應義塾高校からも報告者を招いて、音楽、国語、読書などの教育現場からの報告や総合的な視座からの問題提起、さらにはディスカッションによるコメントなど、身体知を多面的に扱った。フロアとの議論も活発に展開された。参加者は約50名であった。

この2回のシンポジウムの内容は広報・発信セクションにより、シンポジウムと同じタイトルを冠した報告書にまとめられ、関係者に配布された。なお、4回のシンポジウムの報告書はすべて教養研究センターのホームページ（<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts>）からPDF形式のファイルとしてダウンロードすることができる。

2) 基盤研究の本格的始動

教養研究センターの基幹活動とも言うべき基盤研究を本格的にスタートさせた。慶應義塾における教養教育の現状把握から始まり、その長所・短所等の検討を経て、慶應義塾の新しい教養教育モデルの提言を目指してハイピッチで調査・研究活動を展開しつつある。

3) 教養研究センター実験授業の開講

教養研究センターの特定研究である学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクトのコア・プロジェクト「リベラルアーツ教育の総合モデル構築」との連携のもとで、教養研究センター設置実験授業「スタディ・スキルズ」を秋学期に2コマ開講した。大学（特に学士課程）における教養教育の役割を、学生たちが大学という学びの場のみならず卒業後の長い人生においても「よりよく学び」、「よりよく生きる」ことができるための基盤作りにあるとの考えを背景として、その出発点としての「学びの作法・技法」を習得することがこの授業の直接的な目的である。しかも、ただ技術に限定することなく、大学を支える知の世界の広がりを経験し、これを習得した作法・技法と結び付けることでより深い浸透をはかるために、それぞれが総合教育科目「身体／感覚 文化」もしくは極東証券寄附公開講座「生命の魅惑と恐怖」とのセット履修形式を取った。履修者は一方が21名、他方が14名であった。授業に対する履修者の評価が高かったため、2004年度からは正規のカリキュラムに組み込まれることが認められた。

4) 慶應義塾大学教養研究センター選書の刊行

教養研究センター所員・研究員がそれぞれの最新の研究成果の一端をいわゆる学術書・学術論文とは異なる切り口で学生・一般読者向けにいち早く発信し、その新鮮な知の生成に立ち会う機会を提供することを目的として、「慶應義塾大学教養研究センター選書(Mundus Scientiae)」の原稿を公募し、選定の結果、桜井準也氏（慶應義塾大学文学部助教授）の『モノが語る日本の近現代生活 近現代考古学のすすめ』を刊行した。今後、年1、2冊のペースで刊行を予定している。

5) 新入生歓迎行事・極東証券寄附講座・慶應義塾港北区民講座の実施

HAPP、極東証券寄附講座運営委員会、港北区民講座運営委員会の各委員会との連携のもとで一連の新入生歓迎行事、極東証券寄附公開講座「生命の魅惑と恐怖」、慶應義塾港北区民講座「DNA とナイロンの実験をしてみよう」の企画・運営に参画した。

6) 連続セミナー「FDを考える」の実施

研究推進セクションとの連携のもとで、義塾内

外から講師を招いて連続セミナー「FDを考える」の企画・運営に参画した。今年度は以下の3回のセミナーを実施した。

- ・第1回「アメリカの授業運営・FD事例の報告」
2003年10月9日（木）に開催。参加者は21名。
- ・第2回「学生による授業評価とFD活動 シラバスと授業評価・SFCにおける12年の推移」
2003年10月30日（木）に開催。参加者は27名。
- ・第3回「日本の大学の欠陥を補完する制度・GPA / アドバイザー制度」
2003年12月4日（木）に開催。参加者は30名。

7) シリーズ「開かれゆくキャンパス」の実施

交流・連携セクションとの連携のもとで、第1回「国際学生懇談会 in Hiyoshi」の企画・運営に参画した。これは留学体験を持つ学生と留学生を中心とした学生企画である。

8) 一般研究プロジェクトの選定

教養研究センター所員に対して一般研究プロジェクトを公募し、下記の9プロジェクトを選定した（カッコ内は研究代表者と慶應義塾における所属）。なお、公募は単年度ごとで2回まで継続申請ができる。

- ・「解析的整数論の諸相」（桂田昌紀・経）
- ・「数理解析とその周辺」（池田薫・経）
- ・「英語共通カリキュラムにおける教材・テスト・教育方法」（松岡和美・経）
- ・「行動遺伝学の方法を援用したパーソナリティの構造の解明に関する研究」（木島伸彦・商）
- ・「高次生命現象理解のための細胞行動データベースの作製」（金子洋之・文）
- ・「近代日本の衛生統計と疾病地理学 FCRONOS による」（鈴木晃仁・経）
- ・「20世紀初頭の日本におけるメディア革命の比較文化理論的研究」（識名章喜・商）
- ・「表象文化論のデータベース化と映像と音響の融合への実験的試み」（小瀧昭夫・経）
- ・「地域文化振興および社会教育と芸術ホール 日本の公立芸術ホールと米国大学ホールの比較考察」（中矢一義・法）

9) 他大学・他機関への調査

今年度は上記の連続セミナー「FDを考える」に関連して、2003年9月にコネチカット大学、メリーランド大学(共に米国)におけるFDの現状調査を行った。また、2004年1月にはソウル国立大学校(韓国)における教養教育の実態調査を行った(下記3を参照)。

10) 他大学・他機関との交流・連携

海外ではプサン国立大学校、成均館大学校(共に韓国)から教養研究センターへ調査団が来訪した。国内では横浜市・港北区・川崎市・人形劇団わらび座・極東証券株式会社・慶應義塾大学出版会等との連携の可能性を検討した。このうち極東証券については引き続き寄附講座として公開講座を開催した。港北区についても引き続き区民講座を開催したが、2004年度については諸般の事情により講座は休講することとなった。慶應義塾大学出版会からは2002年度に続き指定寄附の申し出があった。

義塾内については、福澤研究センターとの連携のもとで2005年度開講を目指した講座(授業)設置に向けての検討に入った。また、外国語教育研究センターとの連携の可能性について議論を開始した。

11) 研究企画ボード会議の開催

今年度は毎週水曜日の昼休みを利用した定例会議を開催した。その他、必要に応じて臨時会議やメーリングリストによるメール会議を適宜開催した。

(羽田 功)

3. 他大学調査

【訪問】ソウル国立大学校

2004年1月下旬に鈴木伸一(医学部専任講師 教養研究センター・コーディネーター)が韓国を訪れ、27日と28日の2日に亘りソウル国立大学校のCenter for Teaching and Learning(CTL)で聞き取り調査及び意見交換を行った。CTLは教授法、メディア教授法、学習、アカデミック・ライティング(Academic Writing Lab, AWL)の4部門からなる大学直属の機関で、所長の下、各部門の責任者でもある前任研究員(Senior Researcher)5名を中心に、12~13名の助手と5名程度の事務職員より構成されている(所長以外はCTLの専任)。設立は2001年だが、特に2年前からはシンポジウムやワ

ークショップを開催する等、精力的に活動を展開している。今回は、AWLのKIM Taehwan 前任研究員に全てのコーディネートをお願いした。

1月27日(火)は、LEE Heewon 前任研究員とMIN Hye-Ri 前任研究員から、主として教授法及び学習部門の活動状況をうかがった。教授法部門では、FD関連のセミナーやシンポジウムを継続的に行っている。また、評価の高い授業をモデル・ケースとしてCD-ROMに録画し各教員に配布しているほか、教材準備や財政支援等も行っている。学習部門では、プレゼンテーションやディスカッション、あるいは英文での論文作成についてのワークショップを開いているが、学生の間では特に後者の人気が高い。ワークショップは希望者のみを対象にしており、また学生の必要性に合致していることから、参加者も自発的でモチベーションも高い。CTL設立当初は、まず教員支援が念頭にあったが、上記のような現状に鑑み、現在は徐々に学生支援へと重点が移行してきている。メディア教授法部門は、主にe-Learningの技術支援等を担当しているようである。

翌28日(水)は、最初にKIM 前任研究員からAWLの活動内容や今後の展開を聞いた。AWLが本格的に始動したのは1年ほど前からだが、大学の方針としてCTLの中でも強化が計られており、前任研究員・助手のほぼ半数がAWLに所属している。日常の活動としては、希望する学生に対してレポートや論文作成の個人指導(問題発見、論理構成、引用等の助言)を行っている。また、先学期にはワークショップも学生用を4回、院生用とTA用をそれぞれ1回ずつ開催した。さらに、2004年の秋学期には、各学部の協力を仰ぎながら、専門性を持ったアカデミック・ライティングのゼミ



JEON Hyung-Jun 教授と



(左から) LEE Heewon 前任研究員、KIM Taehwan 前任研究員、
(一人おいて) MIN Hye-Ri 前任研究員

を13クラス立ち上げることが決定しており、そのために人員(専任)を3名拡充することである。

この後、JEON Hyung-Jun 教授(CTL 所長)から CTL 設立の経緯等をうかがうことが出来た。JEON 教授によれば、社会の変化に伴い、韓国でも全体的な学力の低下や学生の活字離れがみられるようになった。また、画一的な教育システムの結果、大学で求められる獨創性や批判的精神が疎かになる傾向があった。ソウル大学でも10年ほど前からこのような状況を認識しており、90年代前半には、獨創的で批判的な学生を選抜する試みとして、それまでの択一式から論述式・小論文方式へと入試システムを切り替えた。しかし、この新システムは改善には役立つものの一長一短があったため、学生全体のレベルアップを目的とした CTL を設立することとなった。また、2004年秋からアカデミック・ライティングを拡充することに関連して、将来的には全学生に義務化していく必要性を JEON 教授は強調している。最後に、今後とも相互に連絡を密にして情報交換を行っていくことを確認した。

日韓の社会構造や教育システムには類似点が多く、またそこに内在する教育上の問題にも共通するものが多々見られる。たとえば、CTL 側からも日本の状況や教養研究センター(特に「スタディスキルズ」)についてさまざまな質問が出たが、それは又、抱える問題の共通性を再認識させるものでもあった。従って、そのような中でさまざまな活動を既に展開している CTL の試みや成果を、教養研究センターの活動に反映させていく意義は大きいように思われる。(鈴木伸一)

【来訪】

1) 成均館大学校

2003年7月14日に成均館大学校の Son, Dong-Hyun 教授が来訪した。教養研究センターで考えている教養教育のカリキュラムや新しい試み、その中で教員の協力体制、といった教養教育に関するさまざまな角度からの質問に横山千晶法学部教授が答えた。

2) プサン国立大学校

2004年2月10日(火)にプサン国立大学校の Center for Curriculum Development and Instruction から YANG Wang Yong 所長及び委員ら下記13名が来訪した。当日は、10時より11時30分まで、来往舎小会議室にて説明および質疑応答が行われた。プサン国立大学校からの質問としては、慶應義塾における教養教育の取り組み方、教養教育の取り組みにおける試み、教養教育をより良くするための方法等々があった。

来訪者：

YANG Wang Yong (韓国語教育学 教授)
KIM Yoo Shin (電子工学 教授)
LEE Wang Joo (倫理教育学 教授)
MOON Jeon Ok (薬学 助教授)
KWAK Cha Seop (歴史学 助教授)
CHOI Heon (韓国音楽 助教授)
IM Yung Ho (コミュニケーション学 教授)
CHO Jung Rae (数学 教授)
LEE Keun Mo (体育 助教授)
KO Hyun Chul (韓国語文学 講師)
KIM Ki Hyuk (地理学 教授)
LEE Shi Bok (機械工学 教授)
HAN Youn Ah (韓国語文学 修士)

説明者：

近藤明彦(体育研究所)
下村 裕(法学部)
石井 明(経済学部)
鈴木伸一(医学部)
横山千晶(法学部)
境 一三(経済学部)
篠田一輝(学事センター)

2003年度の研究推進セクションは科学研究費補助金取得勉強会の開催と教養研究センター連続セミナー「FDを考える」(3回)の企画・実施を中心に進められた。

1. 科学研究費補助金取得勉強会

科学研究費取得のための勉強会は2003年10月2日に行われた。講師として武藤浩史(法学部教授)、木島伸彦(商学部助教授)、村上利恵子(日吉研究支援センター)を迎え、西川正二(商学部専任講師)の司会のもと、実際の申請書の書き方について話を伺った。まず、武藤氏(基盤研究:分野:人文学、分科:文学、細目:ヨーロッパ語系文学)は、ご自分の昨年度の申請書のコピーを配られて、非常にわかりやすく、各項目別に、懇切丁寧に、どのように書けば採択されやすいと思われるかという点を説明された。研究課題「科学のおよび文化史の感覚研究を援用した英文学・文化感覚史」の題名にも窺われるように、従来の英文学の狭い領域の研究ではなく、脱領域的、先端科学との関連性のある、独創的な研究テーマが採択された理由として、推測された。また、研究目的のなかに、教養教育への貢献という側面を述べたこともプラス要因として挙げられた。木島氏(若手研究:分野:文学、分科:心理学、細目:教育・社会系心理学、研究課題:行動遺伝学的手法を援用したパーソナリティ理論と測定法の構築に関する研究)は、パワーポイントで昨年度の申請書をご提示され、審査員が読みやすいようにするための具体的な工夫(キーワードは太字、主張するところは下線)を、ご説明いただいた。また、研究課題の内容については、「世界で初めて」という言葉の使用、その分野で問題になっている最新の専門用語の活用、その研究の国民のためになる応用(政策)とのリンクを意識した点、現代の社会問題との関連への言及などが採択理由として、挙げられた。さらに、その分野の誰が審査するかという、具体的な審査員(これは分野によってはわかりやすい場合もある)を思い浮かべて申請書を書くことも必要ではないかと指摘された。おふたりの申請された研究に共通した点は、申請研究は「従来の特定分野の狭い専門領域の研究ではなく、広く多様な分野と連携し、現代の先鋭的な問題に関わった研究テーマを扱っている」ということが重要であると言えるかも知れない。最後に研究支援センターの村上さんから、記入漏れのしやすい箇所など、申請の事務的な注意事項を配布資料に沿ってご説明いただい

た。科学研究費に関する情報として、慶應義塾の研究支援センターのホームページの活用の広報も必要であると痛感した。26名の参加者があり、活発な質疑応答が行われ、盛況のうちに幕を閉じた。

(西川正二)

2. 教養研究センター連続セミナー「FDを考える」

大学設置基準の大綱化以降によるカリキュラムの改定以降約10年が経過し、各学部では改定されたカリキュラムの見直しが始まっている。また、2004年度からは国立大学が独立行政法人化されることもあり、大学はその研究・教育の質について社会的評価を受ける必要があるということも指摘されている。FD、シラバス、学生による授業評価等の事項も聞きなれた用語となってきたが、第三者機関による評価とともにこれらの事項は自己点検自己評価に欠くことのできない要素となっている。しかしながら、これらの事項について深い議論がこれまで成されてきたかというそうではないのが現状である。そこで、教養研究センターでは教育内容の維持・向上を図るために行われているFDに関するさまざまな事項やその状況について、その理解を深め今後より活発な議論ができることを願い連続セミナー「FDを考える」を開催することとした。

2003年度は10月9日「FDの事例報告 アメリカの授業運営」講師:松岡和美(経済学部)コメンテーター:石井康史(経済学部)、10月30日「学生による授業評価とFD活動 シラバスと授業評価・SFCにおける12年の推移」講師:井下理(総合政策学部)、12月4日「我が国の大学の欠陥 解消の一方法としてのG.P.A.制度」講師:諸星裕(桜美林大学副学長)の3回のセミナーが開催された。

セミナーの内容は慶應義塾大学教養研究センターレポートとしてまとめられた。このレポートは、<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>からダウンロードすることができる。

(近藤明彦)

1. 2003年度の活動目標

2003年度は、前年度のセクションの意向を引き継ぎながら、主に以下の3つの方向で活動することを目標とした。

キャンパス内外における国際的な交流・連携

大学と一貫校との交流・連携

日吉キャンパスと周辺地域との交流・連携

そして、この3つの方向で展開されるプログラムを「開かれゆくキャンパス」というシリーズ企画として構成していくことが決定された。

2. 「開かれゆくキャンパス1：国際学生懇談会 in Hiyoshi 海外留学から学んだこと」

「開かれゆくキャンパス」の第1回目として、2003年12月12日（金）にシンポジウム「国際学生懇談会 in Hiyoshi 海外留学から学んだこと」を来往舎シンポジウムスペースにて開催した。このシンポジウムは、マリ・ガポリオ経済学部助教授、小淵昭夫経済学部教授のコーディネートのもと、パネリストに外国人留学生4人（姜麗娜〔中国、法学部1年生〕、ベ・ヘリ〔韓国、経済学部1年生〕、フランク・ピドウ〔フランス、商学部1年生〕、マリア・スザンネ・フメル〔ドイツ、日本語コース〕、そして海外留学経験のある日本人学生3人（吉野慶一〔経済学部4年生〕、前田陽一〔経済学部4年生〕、長田圭子〔経済学部3年生：司会〕）を迎えて行われた。

シンポジウムは、上記7名のパネリストが、それぞれの立場から異文化においてどのようなカルチャー・ショックを感じ、それを乗り越えたか、

また言語や生活習慣といった新しい環境の違いから生じたさまざまな問題をどのように解決し、社会に適應したかなど、成功例・失敗例を織り混ぜながら語った。さらに、それぞれが留学した国における大学教育と自分の国の大学教育を比較検討し、これからの大学教育には何が必要か、提言を行った。

参加者は、学生、教職員あわせ、約40名を数え、パネリストたちとの熱心な質疑応答が展開された。

3. 今後の課題

2003年度は、「開かれゆくキャンパス1：国際学生懇談会 in Hiyoshi」により、とりえず上記の活動目標が達成されたので、2004年度は、残るふたつの活動目標（大学と一貫校との交流・連携 日吉キャンパスと周辺地域との交流・連携）に関して、「開かれゆくキャンパス」の第2回と第3回を企画する予定である。

に関しては、塾内の小学校、中学校、高等学校で、学校を社会に開く興味深い試みを行っている事例を集め、担当教員を交えたシンポジウムやワークショップを行いたいと考えている。

に関しては、商学部の総合教育セミナー「21世紀の商店街」などとも連携しつつ、日吉地域の町づくりに慶應義塾大学がいかに貢献できるか、日本全国の同様の事例や横浜市の文化行政などを参照しつつ、シンポジウムやワークショップを通して考えて行きたいと思っている。

（熊倉敬聡）



広報・発信セクションは、教養研究センターの活動全般を広報し、さらに研究成果を広く社会に発信することによって、教養や教養教育について積極的な提言を行うことを使命としている。広報・発信セクション担当の副所長は、2002年9月30日までが木俣章、2002年10月1日以降が下村裕、という人事の異動があった。本年度における広報・発信セクションの活動を以下に列挙する。

1. 2002年度活動報告書の刊行

教養研究センターの成果発表は、活動報告書にまとめられる。2002年7月1日のセンター開所から2003年3月31日までの報告を、羽田功所長、木俣章副所長、近藤明彦副所長が主体となって編集し、2002年度活動報告書として2003年7月31日付けで発行した。活動報告は、運営委員会 コーディネート・オフィス 研究活動に分けて報告し、センター発足の経緯やセンター規定なども、資料として収録した。A4版60ページで、制作は株式会社アド・プリントである。

2. センター・ニューズレター第2号の発行

近藤明彦副所長による巻頭記事「実験授業『スタディ・スキルズ』開講」、2件の共同研究クローズアップ、3件の活動報告、トピックス「他大学調査報告」、5件のインフォメーション、そして事務局だよりによって構成されている。広報・発信セクションのメンバー、篠原俊吾所員、松岡和美所員、木俣章副所長が編集作業を担当し、A4版8ページ、制作は慶應義塾大学出版会、発行日は2003年7月15日である。

3. センター・ニューズレター第3号の発行

羽田功所長による巻頭記事「基盤研究が本格的にスタート!」、4件の共同研究クローズアップ、9件の活動報告、トピックス「SFCのCOL『問題発見・解決型教育の先導実践』」、3件のインフォメーション、そして事務局だよりによって構成されている。

広報・発信セクションのメンバー、篠原俊吾所員、大出敦所員、下村裕副所長が編集作業を担当し、A4版8ページ、制作は慶應義塾大学出版会、発行日は2004年1月15日である。

4. センターシンポジウム3「自然科学系を核とした教養教育の将来」の刊行

第3回教養研究センターシンポジウムは「自然科学系を核とした教養教育の将来」というタイトルで、2003年7月4日(金) 来住舎一階のシンポジウムスペースにて円卓方式で開催された。パネリストはすべて本塾教員で、増田直衛文学部教授(心理学教室)、小瀬村誠治法学部助教授(化学教室)、金子洋之文学部教授(生物学教室)、青木健一郎経済学部教授(物理学教室)、小宮英敏商学部教授(数学教室)の5人であった。なお、パネリストの一人である増田氏が司会者を兼ねた。このシンポジウムの記録である本冊子は、パネリストと参加者の全発言、および当日の資料などを収録し、2003年9月30日に刊行された。広報・発信セクションのメンバー、安田淳所員、野口和行所員、木俣章副所長が編集作業を担当し、A4版44ページ、テープ起こしは有限会社ピーシーウェブ、制作は慶應義塾大学出版会である。

5. センターシンポジウム4「身体知を核とした教養教育の将来」の刊行

第4回教養研究センターシンポジウムは「身体知を核とした教養教育の将来」というタイトルで、2003年11月26日(水) 来住舎一階のシンポジウムスペースにて円卓方式で開催された。司会は小菅隼人本塾理工学部助教授、パネリストもすべて本塾教員で、石井明経済学部助教授、村山光義体育研究所専任講師、野津将史高等学校教諭、鈴木淑博普通部教諭、熊倉敬聡理工学部助教授であり、ディスカッサントは楠原偕子本塾名誉教授(日本橋学館大学教授)であった。このシンポジウムの記録である本冊子は、パネリストと参加者の全発言、および当日の資料などを収録し、2004年2月4日に刊行された。広報・発信セクションのメンバー、岩波敦子所員、坂田幸子所員、下村裕副所長が編集作業を担当し、A4版36ページ、テープ起こしも含めた制作は慶應義塾大学出版会である。

6. センター選書の刊行

教養研究センター選書第一巻を2004年3月31日に発刊した。これは、学術研究成果の一端を、学生を中心とする一般読者にいち早く発信して新鮮な知の一石を投げ、研究・教育相互の活性化を目指す

して出版された市販のブックレットである。2003年度は4件の応募があり、厳格な審査を経て、その中から1件が採択された。桜井準也氏著『モノが語る日本の近現代生活』である。羽田功所長、近藤明彦副所長、熊倉敬聡副所長、木俣章前副所長、下村裕副所長が中心となってデザインやロゴ、そして著者との出版契約を検討し、発刊に至った。数多くの図や写真、羽田功所長による趣旨説明「刊行にあたって」を収録し、縦横比が黄金比の四六版変形、Mundus Scientiae (知の世界)のロゴ、縦書き80ページ、制作は慶應義塾大学出版会である。

7. センターホームページの拡充

本年度、千田大介所員の協力により、スタイルシートを使用したより見やすいホームページ (<http://www.hiyoshi.keio.ac.jp/>) に変更した。また近藤明彦副所長、境一三所員、千田大介所員、小林宏充所員のアドバイスにより、カテゴリーを以下のとおり、より分かりやすい分類に変更した。

- ・新着情報...教養研究センターのニュースを掲載 (随時更新)

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/index.html>

- ・紹介...教養研究センターの紹介

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/shoukai.html>

- ・研究...教養研究センターで行われている研究について (特定研究 / 基盤研究 / 一般研究)

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/kenkyu.html>

- ・行事...教養研究センター主催の行事について (随時更新)

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/event.html>

- ・刊行物...教養研究センター編集・発行の刊行物について、PDF形式で掲載 (随時更新)

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/publication.html>

また、2003年度に教養研究センター主催で行われた活動の情報を、以下のサイトに掲載した。

【シンポジウム】

- ・2003年7月4日(金)第3回シンポジウム

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/event-sympo3.html>

- ・2003年11月26日(水)第4回シンポジウム

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/event-sympo4.html>

【FDを考える】

- ・2003年10月9日(木)第1回

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/event-fd1.html>

- ・2003年10月30日(木)第2回

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/event-fd2.html>

- ・2003年12月4日(木)第3回

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/event-fd3.html>

【極東証券】

- ・2003年10月7日(火)~12月16日(火)全10回

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/event-kyokuto15.html>

【実験授業「スタディ・スキルズ」】

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/event-ss.html>

【港北区民講座】

- ・2003年9月20日(土)

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/event-kohoku15.html>

【シリーズ開かれ行くキャンパス1「国際学生懇談会」】

- ・2003年12月12日(金)

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/event-series1.html>

【その他】

- ・「新着情報・過去分」

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/indexpast.html>

広報・発信セクションの活動は、多くの関係者の協力によって成立しえたものである。著者諸氏、日吉研究支援センタースタッフ、並びに慶應義塾大学出版会の坂上弘社長、編集部の小磯勝人氏に感謝する。

広報・発信セクション会議日程

2003年4月8日、10月20日、2004年4月7日

(下村 裕)



コーディネート・オフィス
日吉行事企画委員会
(HAPP)

2003年度、日吉行事企画委員会(HAPP)は、新入生歓迎セクションと公募企画セクションを新たに二本の柱と定めて行事を企画・開催した。新入生歓迎セクションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトで、第一線で活動するアーティストや地域住民を巻き込んだ行事を行った。ここでは、新入生歓迎コンサート「春の声」、地域住民参加型「フットサル」などこれまで好評を博した企画を継続するとともに、語学視聴覚研究所(現外国語教育研究センター)との共催による荻野アンナ教授講演会、慶應能楽研究会(観世会)との共催による坂井音重氏の能楽公演「葵上」、アートセンターとの共催による和栗由紀夫舞踏公演「野の婚礼 新しき友へ」など塾内諸機関・諸団体との共同開催がひとつの特徴となった。さらにパトリック・ヌジェによるシャンソン・コンサート、そして、恒例になった「塾長と日吉の森を歩こう」(秋学期特別企画)なども企画された。一方、公募企画セクションは、主として秋学期に行う塾生・教職員の自主企画をHAPPが主催するものである。2002年度の学生自主企画の経験を踏まえて、新学期早々には公募を開始し、夏休み前には選定を終え、実行した。詳細は後述する。なお、活動内容、委員会メンバーなどはホームページで公開され、随時更新されている。

2003年度入学歓迎行事

1. 荻野アンナ講演会「フランス語と私」<視聴覚教室 共催>
日時 / 4月5日(土)
場所 / 第四校舎J21 番教室
2. コンサート「春の声」
日時 / 4月15日(火)
場所 / 来往舎イベントテラス
3. 能楽「葵上」<慶應義塾大学能楽研究会(観世会)共催、慶應観世後援会後援>
日時 / 5月21日(水) 来往舎イベントテラス
4. コンサート「シャンソンの贈り物」
日時 / 5月28日(水) 来往舎イベントテラス
5. 小松原庸子講演会
日時 / 6月4日(水) 来往舎イベントテラス
6. 環境週間2003「分煙」<環境サークルECO共催>
日時 / 6月16日~21日(月~土)
場所 / 日吉キャンパス
7. 舞踏公演「野の婚礼 新しき友へ」<アートセンター共催>
日時 / 6月18日(水)
場所 / 来往舎イベントテラス
8. ボールゲームフェスタ「フットサル」
日時 / 7月15日(火)





場所 / ミズノフットサルプラザ日吉

9. <公募企画> Weather map (学生)

日時 / 11月13・14日(水)

場所 / 来往舎イベントテラス

10. <公募企画> 彩りの書 (職員)

日時 / 12月1～6日(月～土)

場所 / 来往舎ギャラリー

11. <公募企画> 色即是空 (学生)

日時 / 12月5・6日(金・土)

場所 / 来往舎イベントテラス

12. <特別企画> 塾長と日吉の森を歩こう

日時 / 12月6日(土)

場所 / 日吉キャンパス

13. <公募企画> 法学部インテンシブコースドラマ
(教員・学生)

日時 / 12月12・13日(金・土)

場所 / 来往舎イベントテラス・大会議室

14. <公募企画> ARIA (学生)

日時 / 12月19・20日(金・土)

場所 / 来往舎シンポジウムスペース

大学で行われることは全て、専門・教養を含んだ広い意味での学問と結び付かなければならない。我々は、HAPP 新入生歓迎セッションを通して、慶應義塾が自由な発想をもって学問に向かい合う場であることを慶應義塾に新たに学ぶ学生諸君に感じてもらいたいと考えた。同時に、HAPP 公募企画セッションによって、慶應義塾は主体的な活動を通して学問を身に付け伝達してゆく場でありたいと願った。2003年度、この目的は、上記活動の円滑な実施によって、ある程度実現できたのではないかと考える。今後の展望として以下3点を挙げる。

この委員会に関わる教員・職員の負担を職務として評価すること、あるいは負担を軽減すること：この点に関しては、現在、委員会に関わる教員・職員の厚意と熱意によって、各企画が実現されているのが現状である。職場の中での、手当て・評価が必要である。

実施行事をアーカイブとして構築してゆくこと：今後、継続的にこの企画を実行してゆく中で、いずれ過去の企画が研究教育実践の記録としての価値を増してゆくであろうことは容易に想像できる。そのため、どこかの段階で予算を取りアーカイブを構築することを目指すべきであると考え。あわせてメディアセンターなどと連携し、資料として永続的に保管する方法を考えたいと思う。

他研究所、センター、学部との連携：2003年度は、荻野アヌナ講演会において視聴覚教室と、能楽公演において慶應義塾大学能楽研究会(観世会)と、舞踏公演においてアートセンターと共催した。他学内センターなどとの共催により、広報、予算、労力の面で大きなメリットがあった。今後、このような形の連携をさらに促進することで、教育・研究の効率化のみならず、より大きな企画が可能になると考え、一層推進すべきだと判断する。

(小菅隼人)



1. 新たな歩み

当運営委員会では、2003年度極東証券寄附公開講座を企画するに当たり、過去3回の実績と反省点を踏まえ以下のような基本方針で臨むことを確認した。

学外への公開性を維持しつつも、講座の主たる受講者が塾生であることを再確認して、学生のニーズと便宜に沿う講座を設置すること。

そのため、近い将来の単位化を視野に入れて「教養研究センター設置科目」として自立できるような要件、たとえば、曜日・時限の固定化などを図ること。

並行して企画の進んでいる実験授業「スタディ・スキルズ」との連携を目指すこと。

オムニバス形式の講座に総合性や有機性を持たせるために、コーディネーター制を導入して講座の組み立てから授業管理まで、一貫した責任体制を明確にすること。

講座のテーマは、教養教育研究会の報告書『教養教育グランド・デザイン 新たな知の創造』で提起された「知の総合講座」のコンセプトに依拠して、多領域・多分野にまたがるもので、それぞれの講師が、自らの専門を生かして知的世界の妙味を学生に伝えられるものを選ぶこと。

上記の基本方針に沿って運営委員会で討議を重ねた結果、本年度は「生命」というテーマを軸にそれに関連する諸領域を緩やかに結び合わせるような総合講座を組み立てることとし、武藤浩史、斎藤太郎、田上竜也の3名にコーディネーターを委嘱した。また、これまで講師の都合に合わせてまちまちであった開講日時も火曜日5時限目に固定して、学生が受講しやすい設定をはかることとした。さらに、講演会的な受身の聴講形式を排して濃密な講義とするために、受講者数を学生70名、一般50名に制限することにした。

2. 2003年度極東証券寄附公開講座『生命の魅惑と恐怖』

2003年度の講座は、『生命の魅惑と恐怖 生命にまつわる多彩な知をめぐって』という総題のもと、哲学、文学、社会学、法学、生命倫理学、犯罪心理学、医学など関連諸科学の多彩な専門家を糾合した形で、10月7日(火)のガイダンスを皮切りに12月16日(火)まで全10回にわたって開講された。そのパンフレットに趣旨をしるしているのでここに採録しておく。

《いま私たちはまぎれもない危機の時代に生きています。しかし、これと裏腹に私たちの日常は平和のう

ちに過ぎていくようにも思われます。深く進行する危機をどこかで意識しながらも、表向き平和な日々の生活に流されていく。そんな状況の中で、人間がなお未来を生きていくためには、私たちはあらためて「生きる」という人間・生物の基本的な営みについて考え直す必要があるのではないのでしょうか。とりわけ21世紀を生きる若い学生諸君にとって、個人的にも社会的にもきわめて重要な問題を考えることは、自らの「生(いのち)」を作り上げていく営みの基盤ともなるはずです。

この講座の目的は、生命科学、生命倫理、生命システム論、生命主義から身体芸術にいたる多様な領域で「生きること」「生命」問題に関わる研究や表現活動を展開されている講師陣を迎えて、困難な思考状況を生きる若い受講者を刺激し、活性化することにあります。「生きること」「生命」にまつわる多彩な知の形に触れることで、受講者それぞれが自主的、独創的、領域横断的な「ものの観方」を獲得することができるならば、本講座の趣旨・目的は全うされたといえるでしょう。学生諸君の積極的な受講を期待しています。》

講座は、日吉キャンパス来往舎1階のシンポジウム・スペースにおいて行われたが、講師とその演題は以下の通りである。

- 10月7日「ガイダンス 生命をさまざまに考えることから始めてみよう」
- 10月14日「生きろって言われても シニカルでリズムカルな私達へ」法学部教授 武藤浩史
- 10月21日「犯行前後の精神状態 正常か異常か？」保健管理センター助手 西村由貴
- 10月28日「ナチズムと身体 優生学のユートピア？」商学部教授 識名章喜
- 11月4日「性の魅惑、性の恐怖 現代日本文化をめぐって」東京都立大学助教授 榎橋訓
- 11月11日「生命の法的保護をめぐる諸問題」法学部教授 井田良
- 11月18日「二つの生権力 ホモ・サケルと怪物」立命館大学教授 小泉義之
- 12月2日「バイオエシックスは死生をどう捉えてきたか」東京水産大学教授 小松美彦
- 12月9日「新興・再興感染症の今日的意味」医学部教授 竹内勤
- 12月16日「情報と生命 生き物として輝くために」横浜国立大学教授 室井尚

コーディネーターの武藤浩史による短い総括を引いておく。10回の講義では、脳死問題からナチスの優

生学まで、生命主義から生権力の問題まで、生命関連問題の諸相に否応なく付きまとう光と影、魅惑と恐怖についての熱のこもった刺激的な講演が展開され、その後には多世代間の熱気をはらんだ質疑応答が続きました。生命倫理の問題に科学的知識のみならず人文科学的思考が必須なこと、芸術上の生命主義がファシズム的・優生学的流れに繋がりがつることなどが示されて、領域横断的思考の重要性が、各講義の相互関連から自ずと浮かび上がってきたのではないかと思えます。（「教養研究センター・ニューズレター」3号）

なお、登録者数は、学生67名、一般63名の計130名であり、出席率の良かった90名(学生42名、一般48名)に対して修了証を発行した。

今回は学生の受講者が多く、企画した側の意図が生ける結果となった。また、この講座と連携して行われた同日6時限の「スタディ・スキルズ」にも定員を上回る20名の学生が参加し、講演後の講師たちとの交流などが図られ予想を越えた収穫があったが、詳細は別項にゆずる。

また、10月28日の回にTBSの衛星デジタル放送テレビBS-iの取材を受け、後日シリーズ番組『現代日本学原論』（11月21日放映）の中でその映像が使用されたことを付記する。

3 「生命の魅惑と恐怖」スペシャルエディション H・アール・カオスの公演

生命に対する意識はまず何よりも身体や感覚に根ざしており、身体表現を通じて生命のありように迫る試みは即ち身体知教育の要諦である。今回、公開講座「生命の魅惑と恐怖」の一層の充実を図るために、特別企画として、現在世界から注目を集めているコンテンポラリーダンス・カンパニーH・アール・カオスを招いて、演出家大島早紀子と理工学部教授で高名な舞踊評論家でもある石井達朗との映像を交えたトークショーと、スターダンサーの白河直子他の公演を組み合わせさせたイベントを開催した。演出・振付の大島とダンサーの白河は、10年以上も前から協同で創作舞踊に邁進しており、『春の祭典』『エラン・ヴィータル(生の跳躍)』『カルミナ・ブラーナ』などはその代表作である。

2003年10月16日夕刻に来往舎1階のイベントテラスに飛来したこの不出世のダンスグループを、学生をはじめとする内外の観衆が大きな衝撃とともに迎え入れた。「天井を吹き抜いたガラス張りの来往舎が、待ち望んだようにH・アール・カオスを迎える。それは偶

然ではなく必然のように思えてならない」と企画協力者でもある石井達朗氏はパンフレットに寄せた一文で述べている。

企画段階からさまざまな紆余曲折があったが、運営委員、センター事務局をはじめ「創造工房」の学生諸君らの協力を得て、成功裡に会を全うすることができた。なお、集まった観客は立ち見も含めて350余名であった。また、当日配布用のパンフレット、A4判8頁を制作したことを付記しておく。

4. 「教養」を考える 現代を読みとくために』の出版
2002年度極東証券寄附公開講座『『教養』とは何かよりよく生きるために』から、8つの講演記録と講座最終日に行われたシンポジウムを編集再構成した冊子を2003年9月30日に刊行した。慶應義塾大学出版会による受託出版。判型・意匠を新たに、横組み233頁、定価1800円。羽田功による序言「はじめに」を付す。第部「新たな教養を求めて」 湯川武『『教養』とは 歴史と文明の視点から』 川勝平太「新しい国づくりに求められる教養とは何か」 上野健爾「数学的思考法と教養」 H.J.クナウプ「外国語教育は教養教育に貢献できるか ドイツとの比較考察を通して」 第部「現代を読みとく教養観」 坂上弘『『教養』する現代人像』 椎名武雄「私にとって教養とは」 荻野安奈「耕す人になるために」 松永信雄「現下の国際情勢とこれからの日本」 シンポジウム「教養とは何か（司会 羽田功、パネリスト 荻野安奈、川勝平太、坂上弘、湯川武）」

2003年度運営委員会会議日程

第1回 2003年4月7日、第2回 4月25日、第3回 6月11日、第4回 7月23日、第5回 9月10日、第6回 11月4日、第7回 11月25日、第8回 12月16日

2003年度運営委員

齋藤太郎(文・コーディネーター) 羽田功(経) 木俣章(法・委員長) 武藤浩史(法・コーディネーター) 木島伸彦(商) 田上竜也(商・コーディネーター) 近藤幸夫(理工) 近藤明彦(体研) 河邊博史(保健管理センター) 大西洋平(スポーツ医学研究センター) 高橋幸久(運営サービス) 黒田修正(学事センター、2003.5まで) 富山優一(学事センター、2003.6から) 宮木さえみ(教養研究センター) 杉山良子(メディアセンター) 小磯勝人(大学出版会) (木俣章)

港北区民講座 運営委員会

慶應義塾大学港北区民講座は前回「文化としてのウォーキング」が好評を博したため、本年度も実践講座形式を継続して行うこととなった。2003年9月20日(土)「DNAとナイロンの実験をしてみよう!」と題し、第二校舎の化学教室と生物学教室が連携して生体高分子であるDNAとタンパク質、さらには人工高分子であるナイロン合成に関連した実験講座を行った。対象は小学校高学年(5~6年生)から成人とし、親子でも取り組めて、わかりやすく、楽しい実験を目指した。

参加者は小学生と保護者が10組、一般(成人)が13名(合計26名)であった。第二校舎1階の化学講義室に集合した参加者には名札と実験テキストが配布され、開校式ならびにスケジュールの説明が行われた。続いて実験会場へ移動する途中、生物学教室3階の廊下に並んでいる水槽中のメダカなどを見学した。特にメキシコサンショウウオ(ウーパールーパー)やアフリカツメガエルなどを参加者は興味深そうにのぞいていた。生命の多様性とDNAの遺伝情報との関連が伏線としてあったが、このような機会に大学校舎で行われている研究・教育内容を知ってもらうことも目的のひとつであった。

午前中は小野裕剛(法学部専任講師)によるDNAに関する解説の後、DNA抽出実験を行った。参加者は普段触れることのないホモジナイザーや遠心分離器を操作してサケの精巢から抽出を進め、繊維状のDNA沈殿が現れたときにはあちこちで歓声が上がっていた。

昼食を挟んでビデオの上映が行われた。午前中に取り出したDNAが分子形状としてどうなっているのか、その情報を元にタンパク質がどう作られて、遺伝と関与するのかの理解が深められ、午後から行われたタンパク質とナイロンの実験の導入となった。

午後は大場茂(文学部教授)の指導の下、タンパク質を用いた呈色反応の実験とナイロン合成実験が行われた。特にナイロン合成実験では二種類の液体が接触した面から次々とナイロンの膜が生成し、それをいかにうまく糸状に巻き取るかという点では成人・小学生の区別なく楽しんでもらった。

定刻には実験で合成したナイロンとDNA分子模型の型紙をおみやげに解散となった。午前・午後

の実験とも安全には十分な配慮がなされ、無事に終了したことを申し添える。

慶應義塾大学港北区民講座「実践講座：DNAとナイロンの実験をしてみよう!」

場所 / 慶應義塾大学日吉キャンパス・第二校舎(生物実習室・化学実習室)

定員 / 70名(公募)

対象 / 小学校高学年~成人(小学生は保護者同伴)

申込先 / 横浜市港北区役所 総務部地域振興課 生涯学習支援係

募集期間 / 8月1日から8月29日

決定方法 / 先着順・抽選

広報媒体 / 広報よこはま港北区版、生涯学習情報誌「楽遊学」、港北区ウェブサイト、チラシ、ポスター

参加費用 / 500円(保険料・資料費 当日徴収)

日程 / 2003年9月20日(土)

9:30- 開校式・ガイダンス

10:00-12:00 DNAの説明と抽出実験(生物)

12:00-12:50 昼食(各自)

12:50-13:20 ビデオ上映「世紀の発見~遺伝と進化」

13:30-15:30 タンパク質とナイロンの実験(化学)

コーディネーター / 大場茂(文学部化学教室教授、センター所員)、小野裕剛(法学部生物学教室専任講師、センター所員)

実習指導スタッフ / 萱嶋泰成(法学部生物学教室助手、センター所員)、有岡幸子(法学部生物学教室助手)、町田慶子(経済学部化学教室助手)、鈴木麻珠三(法学部化学教室助手)、福山勝也(文学部化学教室助手)

主催 : 横浜市港北区、慶應義塾大学教養研究センター

(小野裕剛)

自然科学系を核とした 教養教育の将来

第3回教養研究センターシンポジウム「自然科学系を核とした教養教育の将来」は、2003年7月4日(金) 来往舎1階のシンポジウムスペースにて円卓方式で開催され、塾内外から約50名の参加を得た。パネリストはすべて本塾教員で、増田直衛文学部教授(心理学教室)、小瀬村誠治法学部助教授(化学教室)、金子洋之文学部教授(生物学教室)、青木健一郎経済学部教授(物理学教室)、小宮英敏商学部教授(数学教室)の5人であった。なお、パネリストの一人である増田氏が司会者を兼ねた。

シンポジウムに先立って羽田所長から挨拶があり、サッカー日本代表を例に、最先端と基礎・出発点との距離が大きく広まる自然科学では、その距離をうまくつなげる一定の密度、内容、水準を備えた教養としての自然科学教育が今後大いに重要であると指摘した。

引き続き、司会の増田氏によって、日吉教員の14%が自然科学部門に属するという状況と、科学技術に関する知識の低下が報告された。そして本シンポジウムの趣旨が「現在、自然科学系の科目が出発点としてどのような考えを持って授業をしているのか、いまどのような工夫がなされているのか、将来はどうあるべきだと考えているのか、それぞれの立場から議論を展開し、将来の教養教育のあり方を探る」試みをするにありという説明がなされた。

パネリスト講演は小瀬村氏による「科学の言葉で自然の不思議をひも解く」で始まった。昆虫採集の是非を問う授業の再現のためランニング姿で登場した小瀬村氏は、教養教育としての自然科学において「感性を養う」、「地球環境について考えさせる」そして「授業哲学を明確にする」という3点を尊重し「ひよっとしたら自然科学はおもしろいかも」と学生に思わせる授業を目標とした授業を実践していることを報告した。さらに、学生が自然科学に興味をもち、その学生から子孫、そして後世の人類にまでその興味が継承される土壌が作られることを考えると、1000年先に「人類の進歩と自然の調和」の取れた地球環境を実現するために、現在の教養教育が重要な役割を果たすことを指摘した。

続いて、金子氏は「教養教育としての生物学にはたして研究者は必要なのか」というタイトルで講演した。講演の内容は2点に分かれ、第1点は「教養教育における生物学で何をどのように教えるべきか」、そして第2点はタイトルの事項である。第1点の趣旨は、「進化」、「人間の体」、そして「生態系」の3つが中心テーマとして重要であり、そこにいろいろな各論を組み込んだ授

業によって、生物に関わる社会問題を文科系学生がより科学的な視点で考えうるバックボーンを提供できる、ということであった。第2点については、「教員は研究者である必要がある」と結論し、その根拠を「多様なものの見方」、「幅の広いアプローチ」、「壁を破ってやる」というような姿勢、さらに「臨場感」は、研究者こそが還元できる要素であることに見出した。

次に「実験を含む文科系学生のための自然科学教育」というタイトルで、青木氏が講演した。まず講義と実験で構成される科目「物理学」のシステムが説明された。その後、「仕組み」、「根拠」、「経緯」に関する疑問を考える物理学において、文科系学生の教育は「根拠」と「経緯」の配分が多いため実験が重要な意義をもつことが主張され、また本塾で文科系学生が実験履修可能である環境は、日本にある大学の中で貴重である事実が指摘された。最後に、教養教育全般について話が進み、教養とは「いろいろな考え方を理解している」とことであるという意見が述べられた。最後に、豊富な人材を擁する本塾に、「しっかりとした専門教育、それと共に幅広い教養を持った人材を卒業生として輩出する」という個性を希望したいと結んだ。

続いて「数学の効用・・・大学生の場合・・・」というタイトルで、小宮氏が講演した。数学の効用として、数学を用いた分野の理解力、計数感覚力、そして論理の運用能力の習得が考えられるが、それ以外に数学の「抽象性」にも大きな効用があることが主張された。「抽象性」によって、数学の適用範囲は大きく広がり、他分野に刺激を与える可能性が出てくるという趣旨である。その具体例として、UNIX、ゲーム理論、そして簿記論が挙げられ、数学がいろいろな分野で独創的な仕事をするための教養になっていることが示された。

最後のパネリスト増田氏は、まず科学の分類と心理学の位置づけを説明し、二次元的あるいは三次元的な分類図を紹介した。次に「新薬の効果を確認する実験」と「クレーバーハンスの物語」を例に、心理学の「ものの考え方を教える」側面を強調した。そして、アカデミックアイデンティティを模索している心理学を学生にそのまま提示することが、新しい学問を創造する上で重要であると指摘した。

その後、パネリストと参加者との質疑応答の機会が設けられた。「科学を知らないことの危険」、「学部のカリキュラムと教養研究センターの位置づけ」、「学問のつながり、体系をどう教えるか」、「専門とかけ離れた科目を履修させるべきか」等の質問がパネリストに投げ

かけられ、活発な議論が展開された。

羽田所長が最後の挨拶の中で、「教育の議論は『何をどのように学生に伝えれば良いのか』という問題に尽きてしまうのかもしれない」とコメントし、本日のようなシンポジウムやFDを地道に重ねながら成果を積み上げていく重要性を指摘して、シンポジウムが終了した。

なお、本シンポジウムの詳細な記録は、慶應義塾大学教養研究センターシンポジウム3「自然科学系を核とした教養教育の将来」として、2003年9月30日に刊行されている。

(下村 裕)



研究活動

第4回シンポジウム

身体知を核とした 教養教育の将来

教養研究センターの第4回シンポジウムは、2003年11月26日(水)に来往舎1階のシンポジウムスペースにおいて『身体知を核とした教養教育の将来』というテーマのもと開催され、塾内外から48名が参加した。

冒頭で羽田功研究センター所長から、身体知を考えることで知のあり方を見直そうとする当シンポジウムの目的と意義が紹介された後、司会の小菅隼人理工学部助教授(英語)と5人のパネリストの発表が続き、最後にディスカッションの楠原偕子名誉教授と数名の参加者からコメントや質問が出され、活発な質疑応答が展開した。

小菅氏の発表では、司会者である氏があらかじめパネリストに投げかけていたふたつの質問「身体知をどのように定義するか」と「教養教育にとって身体知は必要か」の主旨が説明された。身体知とは深い知的理解のための補助手段なのか、それとも主体それ自身にかえてくるより中心的な知なのか、そしてそれは教養教育において必要なものなのか等の課題が提示された。続く5名のパネリストは、身体知に関して各々の視点から微妙に異なる考えを示しつつも、教養教育における身体知の大切さに関しては共通して肯定的な結論を下した。

石井明経済学部助教授(音楽)は、音楽における身体知を音楽に実践的に触れることで得られる知と定義することによって、自ら担当する対位法学習講座や「18世紀のオーケストラと演奏習慣」と名づけられた演奏実践型講座の身体知的側面に備わる教養教育的意義を論じた。また音楽実践を通じて歴史理解などさまざまな教養が習得されることが示された。

村山光義体育研究所専任講師(体育)は、身体知を人が「からだ」を通して獲得した知を定義づけて、身体知と体育との深い繋がりをまず指摘した。また、暗黙知の中の基盤としての身体知の必要性に触れるとともに、体育教員の側からの具体的な提案として「技」を中心概念とする複数の教員の協力授業という構想が示された。

野津将史高等学校教諭(国語)の発表では、国語教育における身体知的試みとして、いくつかの実践と計画が紹介された。伝統的な手法として素読・暗誦、話す能力開発の手立てとしてプレゼンテーション能力の重視の他に、塾高等学校における文部科学省の国語力向上モデル事業として計画される発信型の総合型国語教育の研究やコンピュータを利用した

情報・表現リテラシー研究が紹介された。また新カリキュラムにおける2年次の「国語表現」という必修教科が国語表現能力を高めることを目的とすることも紹介された。ディベートとプレゼンテーションの組み合わせの有効性も具体例とともに指摘された。身体知を知を実践する能力と規定すれば、それは教養教育のゴールではないかと結論づけられた。

鈴木淑博普通部教諭(国語)の発表では、氏が実践するふたつの試みが紹介された。ひとつは「群読」と名づけられるもので、これはグループで工夫を重ねて文章を朗読するという試みである。普通部の生徒6人のグループが『平家物語』の一節を元気よく群読する様子がビデオで紹介された。もうひとつは「読書へのアニメーション」と呼ばれる試みで、これは本を1冊読ませてそれに基づいたさまざまなゲームを展開することにより読書への動機付けを図る授業法である。遊びの楽しさと深い読みへの到達を両立しうる手立てとして高く評価された。

熊倉敬聡理工学部助教授(フランス語)は自ら参加するNPO「芸術家と子どもたち」ならびにそのプロジェクトASIAS(=ARTIST'S STUDIO IN A SCHOOL)の活動をビデオで紹介した後で、習慣化し無意識化した「ハビトゥスの身体知」の衰退を憂えつつも、「道徳」、「しつけ」、日本の「腰肚文化」等を重視した身体知回復のための公的・私的な試みが偏狭なナショナリズムに回収される危険性をも同時に指摘して、むしろ生の欲動、エネルギー、エロスに表現を与える創造的「脱ハビトゥスの知」の開発の必要性を説いて、それを自らのNPO実践と結びつけた。

以上の多彩な発表の後に、楠原借子氏の好意的なコメントが続き、さらにいくつかの質疑応答があった。シンポジウムは盛況のうちに閉会した。

(武藤浩史)

基盤研究・教養教育研究会の発足

基盤研究は教養研究センターの主眼であり、センター発足当初はふたつの柱を構えていた。すなわち、リベラルアーツ研究と外国語教育研究である。しかるに、2003年9月にこれまでの視聴覚教育研究室が改組されて外国語教育研究センターが設立されたために、当センターにおける研究の比重は大方リベラルアーツ研究にかかることとなった。今後、両研究センターが炉床となって互いに連携を深め、義塾における教養教育の革新発展に寄与せねばならないだろう。

今しも、大学設置基準の大綱化に始まった高等教育理念の転換がその着地点を見出すべき過程に至っており、各々の大学において新たな試行と模索が進行中である。義塾も例外ではない。全塾組織である当教養研究センターの使命は、学部学生に教授すべき教養教育の絶えざる点検・強化と、時代の要請に応じた新機軸の導入に関わる提言を行うことにある。

センターでは2003年11月、新たに基盤研究・教養教育研究会を発足させ、教養教育に関する総合的かつ抜本的な踏査・研究活動を開始した。その第一歩として、日吉・三田設置共通授業科目(全学共通の総合教育科目)の多年度(1993年度、1998年度、2001年度、2002年度、2003年度)・多項目(設置科目数、授業形態、担当者数とその内訳、総履修者数、テーマ分類)に渡る総合的な実態調査を実施して、各科目ごとのデータをフィッシュ化、分析作業に着手している。現状の把握は議論の基礎であり、研究会メンバーがおおよその共通認識を分かち必要があることは言を待たない。これをもとに、当面は以下の二点を研究課題として活動する方針である。

1)全塾的な教養教育・学士課程教育のあり方について理念・目的などの議論を行い、これを基礎として、慶應義塾の擁する豊富な人材を活用した一貫的で体系的な教養教育カリキュラムの実現可能なモデル構築。(羽田所長が座長となり、慶應義塾の教員が多くメンバーとして参加した文科省の委託研究報告書『教養教育グランド・デザイン 新たな知の創造』の成果を生かす試みでもある。)

2)構想されたカリキュラム・モデルを実施に移す際に必要とされる制度や組織の変更・改組などについての検討。

研究会は、別記の18名のセンター所員とセンター所長および3名の副所長が参加し、月1回(5時間)の定例会を開いて調査作業や討議を行う一方、各科目

別に講義担当者を招いてその科目の理念や、教養教育全体における位置づけなどについての意見を聴取している。2005年1月を目途に中間的な提言を起草する予定である。

基盤研究・研究会メンバー

羽田功(センター所長) 下村裕(センター副所長) 熊倉敬聡(センター副所長、幹事) 近藤明彦(センター副所長) 斎藤太郎(文) 納富信留(文、幹事) 辺見葉子(文) 友部謙一(経) 長沖暁子(経) 八嶋由香利(経) 奥田暁代(法) 木俣章(法、幹事) 小林宏充(法、幹事) 辻幸夫(法) 萩原能久(法) 木島伸彦(商、幹事) 佐藤望(商) 種村和史(商) 小菅隼人(理工) 加藤大仁(体研) 辻岡三南子(保健管理センター) 勝川史憲(スポーツ医学研究センター) 小磯勝人(出版会・オブザーバー)

2003年度研究会開催日程

第1回

日時・場所：2003年11月21日 13:00～16:00 来
往舎1F応接会議室

出席者：羽田功、下村裕、熊倉敬聡、納富信留、長
沖暁子、八嶋由香利、奥田暁代、木俣章、辻幸夫、
萩原能久、木島伸彦、種村和史、加藤大仁、小磯勝人
議事： 所長あいさつ 研究会メンバーの紹介

研究会の趣旨説明 幹事の選出 カリキュラム・
チェック・グループ分け

第2回

日時・場所：2003年12月13日 10:00～17:00 来
往舎1F共同研究室101-102

出席者：羽田功、近藤明彦、熊倉敬聡、納富信留、
友部謙一、奥田暁代、木俣章、小林宏充、萩原能久、
種村和史、小菅隼人、加藤大仁、辻岡三南子、勝川
史憲、小磯勝人

議事： 研究会の趣旨説明(補足) 日吉・三田設
置共通授業科目調査の進め方(データ・シートへの記
入、キー・ワード) 教員アンケート 他大学調査
について 討議 教養教育の問題点(教養教育の
理念と現状、コア・カリキュラムの体系的再編、教養
教育の組織再編と実施体制)

第3回

日時・場所：2004年1月28日 10:30～16:30 来往

舎1F共同研究室101-102

出席者：羽田功、熊倉敬聡、近藤明彦、下村裕、斎
藤太郎、納富信留、友部謙一、長沖暁子、八嶋由香
利、奥田暁代、木俣章、小林宏充、辻幸夫、種村和
史、小菅隼人、加藤大仁、小磯勝人

議事： 日吉・三田設置共通授業科目調査(データ・
シートへの記入状況、データの結合など) 各分野、
各科目ごとの現状分析(フィッシュ・フォーマットの作成、
記入担当者の割り当てなど) 分野・科目ごとのゲ
ストスピーカーの招聘について オープン・フォーラ
ムの開催 広報活動について 討議課題の設定
(授業形態を考える、少人数セミナー方式の授業)

第4回

日時・場所：2004年3月10日 10:30～16:30 来往
舎1F共同研究室101-102

出席者：熊倉敬聡、近藤明彦、斎藤太郎、納富信留、長
沖暁子、八嶋由香利、奥田暁代、木俣章、小林宏充、辻
幸夫、木島伸彦、種村和史、小菅隼人、小磯勝人

議事： 日吉設置共通科目別フィッシュのフォーマット
少人数セミナー形式授業科目の学部別フィッシュ化
について 科目別レクチャー(「芸術系」 報告者
熊倉敬聡、「女性学」 報告者 長沖暁子) 討議
教養教育の理念とその目指すところ

第5回

日時・場所：2004年3月24日 10:30～17:00 来往
舎1F共同研究室101-102

出席者：近藤明彦、斎藤太郎、辺見葉子、長沖暁子、
木俣章、小林宏充、辻幸夫、木島伸彦、種村和史、
小菅隼人、勝川史憲、小磯勝人

議事： 科目別担当者によるレクチャー(「物理学」
報告者 表実先生(商) 10:30～12:00、「地理学」
報告者 高木勇夫先生(経)13:30～15:00) 少
人数セミナー形式授業科目の学部別成立事情につい
て(とりまとめ役の種村氏からの報告) 科目別担当
者によるレクチャーの今後の日程 「基盤研究レポ
ート第1号」の発刊について

(木俣 章)

リベラルアーツ教育の総合モデル構築

研究代表者 湯川 武(商学部)

・プロジェクトの目的

本プロジェクトは、新しい時代と社会・文化の変化を踏まえつつ、大学における「教養教育」をどのように再構築すればということ、できるだけ具体的に検討し、そしてその結果を授業の形で実践するためのモデルを作ることを目的としている。

検討の出発点としては、『教養教育グランド・デザイン』(教養教育研究会編、2002)を基にした。

・プロジェクトの活動内容

学生の知的活動、すなわち学問的活動の基本となる技法(これを「スタディ・スキルズ」と呼ぶ)は何であるか、またそれをよりよく学生に伝えるにはどうすればよいかを検討する。そして、そのような結果のうちのもっとも基礎的な部分を「スタディ・スキルズ」のテキスト・ブックとして出版する。ただし、このテキストは実験授業の成果と照合させながらたえず改良していくためのテスト版である。

日吉キャンパスで学ぶ学生たちに、「知」の多様性、相互連関性を理解させ、「知」の世界の広さ、深さ、面白さを伝えるための「知の総合講座」の具体的なプログラムを検討し、それを実践のための準備をすること。

「スタディ・スキルズ」の内容

テーマを選ぶ:さまざまな見方・方法に触れる、自分の知的関心を見定める、自らの問題意識を掘り起こす、テーマを選び絞る=問いを立てる。研究の倫理。

情報のインプット:テーマ=「問い」に沿って知識・情報・データを収集する、文献・インターネット・フィールドワーク・実験などの意味と方法

情報の整理:収集した知識・情報・データを整理する。自らの努力と先人の成果、質的整理と量的整理。

結果のアウトプット:自ら見出した「問い」に対する「答え」を他人に伝える。レポート・論文の書き方、インターネットでの発信、口頭発表の仕方、討論の仕方、批判と改善など。

「身体/感覚 文化」『生命の魅惑と恐怖』との連携

2003年度秋学期に設置されている各学部共通科目「身体/感覚 文化」また、極東証券寄付公開講座「生命の魅惑と恐怖」というオムニバス講座と連携し、その講座の共通テーマのもとに提示される多様な学問的アプローチや考え方、そして相互の連関などについて

触れた学生を対象に「スタディ・スキルズ」の授業を実践した。

その結果は教授法やテキストにもフィードバックされる。複数教員・グループワーク

一方的な講義とは違い、活発な意見交換ができ、ある事項について見解がひとつではないこと、またコラボレーションの必要性を理解する。

情報収集・整理・プレゼンテーションにおけるデジタル機器の使用

デジタルコンテンツを使用する学生の立場からの検討、Web情報の検索法(メディアセンターの協力)、Net Commonsによるグループワークの活性化と限界。

・2004年度の展開

教養研究センター設置講座を開設する。

極東証券寄付講座「生命の教養学」

スタディスキルズ

スタディスキルズ

プロジェクトメンバー

湯川 武(商)、羽田 功(経)、鈴木直樹(経)、木俣 章(法)、鈴木伸一(医)、下村 裕(法)、小菅隼人(理)、中野泰志(経)、増田直衛(文)、佐藤 望(商)、境 一三(経)、横山千晶(法)、近藤明彦(体研)

メディアにおける民族イメージの形成 - 言語の身体性と身体の言語性
研究代表者 羽田 功(経済学部)

・研究会の趣旨

21世紀に入り、「民族」あるいは「民族問題」が重要なキーワードとして喧伝されている。しかし、「民族」という概念には大きく歴史性や地域性、イデオロギー性が影響を及ぼしている。たとえば「民族問題(紛争)」においては、それがあつた時代や地域、イデオロギーが必要とする「民族」イメージを生み出し、さまざまな口実として利用されていると言えるだろう。しかも、その際重要な役割を果たしているのが、文字情報から最新技術にいたる広義のメディアである。民族のイメージはメディアなくしては成立しない。そこでこのプロジェクトで

は、時代・地域の射程とメディアの意味をできるだけ広く取り、メディアを軸として民族イメージの形成過程とその特徴を究明することで、民族にまつわる諸問題の特性、共通性を明らかとし、問題解決の糸口を見出すことを目的としている。

・ 2003 年度活動報告

1. 研究報告会

第九回研究報告会

- ・テーマ：『20 世紀キューバにおける黒人像』
 - ・報告者：工藤多香子(経済学部)
 - ・日時：2003 年 7 月 14 日(土)14 時～ 18 時 30 分
 - ・場所：日吉キャンパス来往舎 1F 101・102 号室
- ##### 第十回研究報告会
- ・テーマ：Kapital und Rasse— Gustav Freytags “Soll und Haben”—

・報告者：Joseph VOGL(ヴァイマル大学メディア学部)

・テーマ：Notgemeinschaft—Kunstwerk der Zukunft und deutsche Nation bei Richard Wagner—

・報告者：Ethel MATALA de MAZZA(ベルリン文学研究所)

- ・日時：2004 年 2 月 14 日(土)14 時～ 17 時 30 分
- ・場所：日吉キャンパス来往舎 1F 101・102 号室

2. その他の活動

打合せ 研究報告会準備の打合せ・研究報告会の反省会・スケジュール調整・資料収集・国内外への調査旅行などにに関する打合せを適宜行った。

資料収集 調査・研究活動に必要な資料・文献の収集作業を進めた。

3. 研究の成果

2004 年度もしくは 2005 年度を目途に研究全体の成果をまとめた出版物の刊行を目指して、既発表の研究については成果の取りまとめに入った。

2005 年度の慶應義塾大学日吉カリキュラムにおける開講を目指した授業化に向けた準備作業に入った。

4. 今後の予定

研究会メンバーによる研究報告会

- ・報告者(予定) :
 - i 石井康史(慶應義塾大学経済学部)
 - ・テーマ：「ラテン・アメリカのセルフ・リファレンス ラテンアメリカ映画、北米映画フランス映画

の中のラテンアメリカ・イメージ (予定)

・日時：未 定

ii 種村和史(慶應義塾大学商学部)

・テーマ：「国を捨て新天地を目指すのは不義か？ 詩経解釈にこめられた殉教意識・民族意識の変遷」

・日時：未 定

iii 白杵陽(国立民族学博物館地域研究交流センター)

・テーマ：未定(イスラエルにおける少数民族像について)

授業化およびテキスト出版の準備

・最終成果の取りまとめの作業を進める。

・2003 年度に引き続き、2005 年度の慶應義塾大学日吉カリキュラムにおける開講を目指した授業化およびテキスト出版の準備作業を行う。

プロジェクトメンバー

石井康史(経) 白杵陽(国立民族学博物館地域研究交流センター) 工藤多香子(経) 佐原徹哉(明治大学政治経済学部) 佐谷眞木人(恵泉女学園大学人文学部日本文化学科) 鈴木透(法) 種村和史(商) 羽田功(経) Vogl, Joseph(ヴァイマル大学メディア学部) Matala de Mazza, Ethel(ベルリン文学研究センター)

インターキャンパスの創出による多文化共生の可能性

研究代表者 熊倉敬聡(理工学部)

2003 年度、「インターキャンパスの創出による多文化共生の可能性」(以下、「インターキャンパス」と略す) は、2002 年度の国内外の視察、および実験的授業「美学特殊 C」での経験に基づき、それらをさらに展開するような形で研究プロジェクトを推進した。以下がその主な活動内容である。

1. ドキュメンタリー映像作品『編集室を編集する』の制作・上映

2002 年度に「美学特殊 C」を履修した学生 4 人(坂田太郎、鳥海希世子、岡元里奈、岩崎由美) が、授業の

一企画として行った「京島編集室」のドキュメンタリー映像作品『編集室を編集する』を制作した。

その上映会を二度催した。

第1回：2003年7月12日(土)来往舎ギャラリーにて。(下記の「インターキャンパス」の活動報告会の一環として行った。)

第2回：2003年11月16日(日)墨田区京島「Rice+」にて。

2. 『「インターキャンパス・プロジェクト」+「美学特殊C」活動報告会 セルフ・オルタナティブ・ユニヴァーシティを求めて』の開催

2003年7月12日(土)来往舎アトリウム+ギャラリーにて開催した。主な内容は、「インターキャンパス・プロジェクト」と「美学特殊C」の活動報告。映像作品『編集室を編集する』の上映。前年度「美学特殊C」の一環として三田の萬来舎で行った「萬来喫茶イサム」を再現する形で、「萬来喫茶」を行った。

3. 「萬来喫茶イサム」報告書の作成

上記「萬来喫茶イサム」の活動報告書を4分冊の形で作成・発行することを計画。現在なお発行中。

4. WEBサイト「横系」の開発・試運転

「横系」は、真に21世紀的なライフ・スタイルを目指して活動したい人たちと組織・プロジェクトが出会い、共にいままでにない活動を作り出していく場である。既存の資本主義的な職種・職場にもう魅力を感じられない人たち。そして、そうした人たちを求めている非営利の組織・プロジェクトが、このサイト上で出会い、一緒になって新しい仕事・職場を立ち上げていく。それをサポートするのが、「横系」である。

2003年度を通して、度重なる協議とプログラミングの結果、「横系」はとりあえずの完成を見た。本格的な運用に向けて、2004年2月から3月にかけて、有志たちにより試運転を行い、問題点を指摘してもらい、改良を重ねた。2004年4月より、本格的な運用を目指していたが、直前で運営・管理体制に支障が生じ、運用開始が6月に延期された。4月現在、問題点を鋭意改善中である。

5. 日吉キャンパス・三田キャンパス周辺のフィールドワーク

「インターキャンパス」では、「横系」の活動と連動す

る形で、日吉キャンパスならびに三田キャンパス周辺に新しい学び場を実験的に設けることを計画している。2003年度は、両地域において、その予備的なフィールドワークを行った。特に、日吉においては、私が担当した授業「美学特殊B(文学部美学美術史学専攻)の学生有志たちが、慶應義塾大学と日吉商店街の共同企画「Hiyoshi Age 2003」に参加し、「繋屋」というワークショップを行い、調査に貢献してくれた。

プロジェクトメンバー

熊倉敬聡(理工)、芹沢高志(P3 art and environment ディレクター)、石橋源士(ライフ・コンセプター)、松丸亜希子(P3 art and environment)、坂倉杏介(教養研究センター兼任研究員)、板澤一樹(教養研究センター学生研究員)

文化としてのウォーキング

研究代表者 近藤明彦(体育研究所)

2003年度「文化としてのウォーキング」プロジェクトでは、2002年度の活動をさらに進め、次の4つの事項について展開を試みた。

19世紀アメリカにおけるウォーキング文化の展開(横山千晶)

表象芸術の中で取り扱われるウォーキングの再考(研究協力者:石井達朗)

セルフ・エフィカシーとエアロビック・エクササイズとしてのウォーキング(研究協力者D: orothhe Alferman)

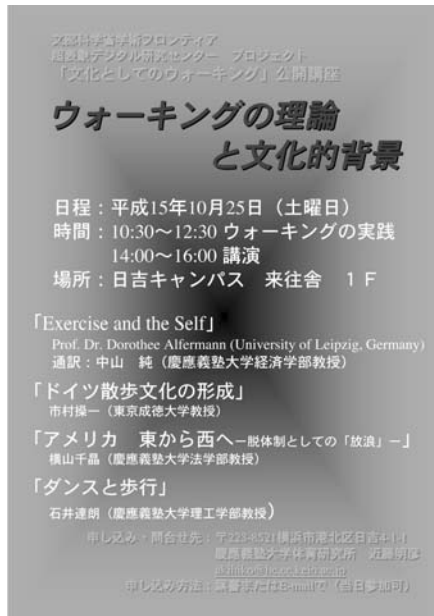
ドイツ散歩文化の形成(市村操一・近藤明彦)

日本におけるウォーキング文化発祥の検討(市村操一・近藤明彦)

歴史とウォーキング(太田弘)

また、成果発表に関しては、2003年10月15日「ウォーキングの理論と文化的背景」として日吉来往者シンポジウムスペースにて公開講座を開催し、広く一般に研究成果を発表した。

以下に研究成果発表に関する一覧を示す。



横山千晶「イギリスにおける歩行文化の形成（『運動+(反)成長 身体医文化論』慶應義塾大学出版会）

市村操一・近藤明彦「ウォーキングと精神 その十のかたち（生涯スポーツ学研究 Vol1.No1）

市村操一・近藤明彦「散歩のはじまりと明治時代の散歩者たち（東京成徳大学紀要第11号）

プロジェクトメンバー

近藤明彦(体研)、横山千晶(法)、市村操一(東京成徳大)、石井達朗(理工)、勝川史恵(スポ研)、太田弘(普通部)

外国語の自律・持続型学習プログラム開発
研究代表者 朝吹亮二(法学部)

フランス語パート

・2003年度活動報告

現在、入門レベルのフランス語教材は、内外を問わず、おびただしいものが出版され、その中にはCD-ROM形式で出版されたものや、ネット上で公開されたものなどマルチメディア教材といえるものも数多い。

したがって、今年度は、日本人学習者、特に大学生

2年生へのターゲットを考慮して研究・教材作成作業が行われた。

機能語、イディオムを中心にした重要表現の選定とデータベース化

学習上重要な不規則動詞の選定とデータベース化
おのおのにつけられた例文に音声とエクササイズを付与することによって、上のデータベースを教育的かつインタラクティブなものにした。またCD-ROMでもネット上でも公開できる形式にした。

に関しては、文を構築する上で、重要になってくる機能語の選定と例文の付与、さらに分を超えたレベルで談話を構築するための機能語や重要表現の選定に加え、それらについて用例がデータベース化された。こういった用例をいかに整理し、効果的なハイパーテキスト化をなすかは、来年度の課題であろう。

に関しては、日本人学習者という観点から、単に活用パターンによる動詞分類という視点にとどまらず、学習効果上どうグループ分けをしながら、整理していくかに重点がおかれた。

・2004年度の活動計画

以上の成果を踏まえ、以下5点を中心に研究作業を続ける。

- データの更なる蓄積と初級フランス語への拡張
- アニメやイラストの付与による更なるマルチメディア化
- データの整理法の研究
- 教室での使用による、効果の研究
- パソコン・インターネット以外のメディアの研究

以上と同時並行して、年末までに最終的に公開できるように仕上げをする。

ドイツ語パート

・2003年度活動報告

2003年3月、大谷とハンス・クナウプがドイツに行き、ドイツの歴史、社会、文化、教育などについて興味深い場所や風景を撮影取材し、多くのデジタル資料を収集した。

2003年6月：その帰国報告の意味で、そのときの資料を利用してひとつ目の教材サンプルを、クナウプを中心に作成し、グループ内で公表・検討を行った。

作成されたサンプルテーマは、「駅（7分程度）」で、ドイツの駅について日本人から見たら意外に思われることを、映像の中で次々に紹介したものである。

2003年8月：1回目の資料収集の仕方を十全に検討した結果を踏まえ、大谷とクナウブとにより、ドイツでの2回目の資料取材が3週間行われ、さらに多くのビジュアルデータが収集された。2回目のドイツ撮影では、撮影機材もセミプロ級のものを用意し、良質の画像と音声を得た。

2003年9月：帰国後の研究会で収集資料の一部のデモが行われ、ドイツで収集されたデジタル映像資料の素晴らしさをメンバー全員で確認した。

またその際に斎藤から、ドイツで作成され市販されているドイツの紹介ビデオが報告され、それと我が班の目指しているデジタル資料との差別化について議論された。これにより我々が作成する手作りのデジタルコンテンツの意義と方向性が再確認された。

2003年11月：ふたつ目の教材サンプル「ポスト」(4分程度)と三つ目の「教育機関」(5分程度)のデジタル教材がクナウブを中心に作成され、グループ内で公開された。

ここでは疑問から出発して、だんだんとその謎がとけてくるという流れの中で映像が組立てられ、見る人の注意を最後まで惹きつける工夫がなされていた。

またサンプル教材は、すべてワンボタンで操作され、全体は10数個の場面ユニット(10秒～30秒)の直列的組み合わせから成っている。見る人はひとつの場面ユニットから次のユニットに行くときに決められたボタンを押すというシンプルな仕掛けになっている。この方式は、パソコン操作に慣れていない人にも簡単に操作でき、その分勉強に集中できる利点を持つ。さらに従来のビデオ教材と異なり、ユニットの内容を理解力に合わせてマイペースで見ることが簡単であるなどの利点がある。

2004年1月24日：学術フロンティア研究の中間報告会で発表がなされた。

発表されたデジタルサンプル教材「サーカス」は、4番目に作られたサンプル教材で、いままでの編集技術の粋を尽くしたものである。デジタル映像の素晴らしさを堪能してもらうためのデモンストレーション用のもので、ドイツの文化紹介が中心に置かれ、プロのアナウンサーによるナレーションによって、ここまで本格的で魅力的な教材が作成可能であるというその限界を見せたものである。

2004年2月24日：1月に行われた報告会の結果が金田一から報告され、今後の最後の1年間の研究計画を協議した。次の段階として、より外国語学習教材の

用途に近づけたものを編集作成することが確認された。また必要な予算についても案が出された。

・2004年度の活動計画

2004年度は、研究を収束させる期間である。いままでに作成されたサンプル教材は、映像としても内容の深さという点でも、かなりのレベルに達した高品質の素材である。しかし、サンプル教材はまだ文化紹介の面が強く、そこに語学教材としての工夫をもっと盛り込む必要がある。次に行うべきことは、教授法の観点から、外国語学習資料としての効果を十分期待できる教材作りである。

以上の観点から、最後の1年間のプロジェクトの進め方を以下のように定める。

6月中旬に、初級、中級、上級の3つのレベルのサンプルを作成する。担当者は、とりあえず初級・岩波、中級・森、上級・大谷を予定しているが、変更もありうる。サンプルは、「ポスト」「駅」「教育機関」「サーカス」の中から作成する。

学力レベルの差異は、主にナレーションや字幕を変えることによって行う。

春学期末に、ドイツ語の授業の中で、このサンプルを利用してどの程度効果のある授業ができるかを試行実験し、結果をまとめる。

春学期末に、サンプルを利用した授業の様子をビデオにとって、モデル授業として資料化する。講師として大谷を予定している。

春学期末に、ドイツ語の授業の後などに、数人の学生を集め、各自にボタンを自分で押させて、サンプル教材を利用して、ひとりで学習する場合の問題点をモニターする。これは本格的な自律型学習教材への布石である。

またその際に、ペーパーによる補助テキストが必要であれば、作成する。デジタル教材と紙媒体の教材とを組み合わせることによって、さらに効果的な教材となる可能性がある。

それらの結果をまとめて、夏休み明けまでに次の報告会用のデモを作成する。

本年度のプロジェクトの予定は以上であるが、ドイツ語でうまくいけば、同じノウハウを他の言語にも応用して、すべての言語で同じような教材づくりを行うことが可能である。これは外国語教員の多い日吉だからこそできる壮大な構想であり、やるだけの意義は十分ある

と考える。

プロジェクトメンバー

フランス語パート: 朝吹亮二(法) 片木智年(文)

ドイツ語パート: 大谷弘道(理工) クナウプ, ハンス(経) 森 泉(理工) 岩波敦子(理工) 斎藤太郎(文) 金田一真澄(理工)

英語パート: 久我俊二(法) 志村明彦(経)

中国語パート: 千田大介(経)

空間と人間: キャンパス・スフェアにおける
適応・生態・表象・デザインの分析と展開
研究代表者 高山 博(文学部)

・プロジェクトの目的と概要

日吉キャンパスを活動の場としている教員(大学・高等学校などすべての教育機関)の人材および知性を、有効かつ多角的に利用し、各々の専門分野で用いてきた「空間」および「人間」という言葉・概念を、多面的・多層的に分析する。

最終的には、日吉キャンパスのスフェア(物理的、心理的「空間と人間」)を解明し、未来予測と新たなデザインを構築する。

・各プロジェクトのテーマ

1. 小瀧昭夫グループ

日吉キャンパスに集う人々(学生・教職員と住民)

2. 岸 由二グループ

日吉丘陵の自然環境(分析・保全・復元)

3. 高山 博グループ

丘陵の先史時代(調査・復元)

4. 櫻井準也グループ

丘陵の歴史時代・近現代(調査・復元)

5. 大西 章グループ

日吉海軍地下壕の調査・紹介と有効利用

6. 坂上貴之グループ

日吉コラボード(電脳空間)の開発

・2003年度活動報告

1. 小瀧昭夫グループ

写真展 [プチエクスポ 2003in Hiyoshi] の開催

以下のイベントの運営・実行の学生、場所を提供する大学と商店街、資金を出す HAPP や日吉商店街組

合といった三位一体の構造が確立しつつあることを写真展示し、解説・分析した。

- ・来往舎での「色即是空」
- ・陸上競技場での「花火と音楽の融合」
- ・日吉商店街でのパフォーマンス「衝うずき2」

2. 岸 由二グループ

湧水を利用したピオトープで矢上川減流産の絶滅危惧魚類ホトケドジョウの自然繁殖に成功した。

一の谷の植物、動物について、生物相の調査を本格的に進めている。

雑木林再生のためのコナラ、クヌギの実生育を進めた。

一の谷を基盤領域とする流域の階層構造について GIS 画像の整備を進めた。

3. 高山 博グループ

前年に続き厚岸湖岸の先史遺跡調査(釧路・厚岸)

80年前に発掘された同上資料の再調査(京都大学)
日吉キャンパス内の遺跡確認・登録

4. 櫻井準也グループ

三浦の漁村近現代史がより明確になった

・片谷地区で50年前発掘の中世墓地を再確認、遺骨回収

日吉海軍地下壕の排土および構造調査

・地下壕に関連すると思われる昭和10年代の陶磁器、ガラス製品、鉄製品、木製品等を回収

・地下壕入り口と思われるベトン構造を確認。当時の設計図と対照研究中

5. 大西 章グループ

櫻井グループの調査・研究

展示「日吉キャンパスにみる戦時下の青春」

03/11 連合三田会中に開催

来客数が2000名を越えた。当時および戦後のキャンパス情報を経験者から聴取できた

6. 坂上貴之グループ

コラボード試験運用開始

私たちの研究に、コラボードを実際に使ってみようと考え、皆様の協力が必要となった。本格運用はまだもう少し後だが、それまでの間に、さまざまな不具合を調整しようと思っている。コラボード2は以下の URL

に準備した (<http://plex.flet.keio.ac.jp/test3/html/>)

・ 2004 年度の活動計画

「日吉学」の構築

日吉丘陵と義塾キャンパスの過去・現在と、往来する人々(大学関係者、住民、買い物客、通勤通学者 etc.etc.)の生態との関係を解明する。

日吉キャンパスを中心とする日吉丘陵の物理的、心理的「空間と人間」の未来と次世代のデザインを考える。

プロジェクトメンバー

高山 博(文)、小淵昭夫(経)、岸 由二(経)、坂上貴之(文)、櫻井準也(文)、大西 章(高等学校)

21 世紀のアメリカをめぐる文化のダイナミズム

研究代表者 近藤光雄(経済学部)

・ 2003 年度の活動報告

昨年より、各自はテーマに基づいて現地調査を行った。継続してその報告会を行い、7 月には中間報告会を行った。研究内容の発信という観点から「アメリカ研究ライブラリー」シリーズが出版され始め、ホームページも立ち上げている。以下にその概要を報告する。

研究会活動報告会

第4回研究発表

2003 年 5 月 10 日(土)2:00 ~ 4:00

演題:ワシントン DC の二つの顔

~ 人工首都の自治 ~

報告者:近藤光雄(経)

司会:奥田暁代(法)

場所:日吉キャンパス来往舎 1F101 / 102 号室

出席者:専任教員 6 名

ワシントン DC の自治の歴史について報告された。現在はワシントン DC 市民は明確な方向を打ち出していないが、裕福な白人層が危機感を持てば将来の方向を打ち出すであろう。

第5回研究発表

2003 年 6 月 7 日(土)2:00 ~ 4:00

演題:世紀末アメリカ映画で観られる

冷戦後の諸問題

報告者:マイケル・エインズ(経)

司会:常山菜穂子(法)

場所:日吉キャンパス来往舎 1F101 / 102 号室

出席者:専任教員 6 名

現在のアメリカ社会が保守化している。人口、所得分配の統計を基にし、貧富の差が拡大しているとの指摘がなされる。このような社会背景で、誰もが金を儲けるという幻想を与えることによってアメリカ国家が維持できる。拝金主義を映画がいかに取り上げているかが論ぜられた。

第6回研究発表 中間報告発表会

司会:鈴木透(法)

コメンテータ:岡田泰男(経済学部名誉教授)/鈴木透(法)/近藤光雄(経)/奥田暁代(法)/常山菜穂子(法)/マイケル・エインズ(経)

日時:2003 年 7 月 12 日(土)2:00 ~ 5:30

場所:慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2F 中会議室

出席者:専任教員 8 名、非専任者 1 名

各自が報告し、それについて岡田泰男先生から論評を頂き、今後の研究のために参考になった。

出版

慶應義塾大学出版会にアメリカ研究ライブラリーを設立して継続的に出版ができるようにしたが、第一冊目として以下が刊行された。

鈴木透『実験国家:アメリカの履歴書』慶應義塾大学出版会、2003

ホームページの立ち上げ

理工学研究科の大学院生の横山暁君の協力を得てホームページを始めることができた。今後の研究と教育にたいへん有益である。

<http://www.hc.keio.ac.jp/america/>

・ 2004 年度の活動計画

研究成果の発信としての出版に積極的に取り組んでいく予定である。2004 年度以降計画されているラインアップは以下の通りである。

2004 年度

常山菜穂子 Lawrence Levine, *Highbrow / Lowbrow: The Emergence of Cultural Hierarchy in America.*

(1988)(翻訳)

全員 学術フロンティア成果の出版化

2005年度

奥田暁代 Houston A. Baker, *Blues, Ideology, and Afro-American Literature: A Vernacular Theory* (1984)(翻訳)

全員『アメリカ研究の名著解説ブックガイド(仮)』

鈴木透 James Deetz, *In Small Things Forgotten: An Archaeology of Early American Life* (1977)(翻訳)

2006年度

全員『アメリカ文化史・重要資料集』

プロジェクトメンバー

近藤光雄(経)、エインジ・マイケル(経)、鈴木透(法)、奥田暁代(法)、常山菜穂子(法)

フレーム意味論・構文的アプローチによるオンライン日本語語彙情報資源の構築(略称日本語フレームネット)

研究代表者 小原京子(理工学部)

・研究の目的

辞書と類義語辞典(シソーラス)の機能を兼ね備えた、オンライン日本語語彙情報資源の構築。その際、コーパスデータを用例として使用し、フレーム意味論と構文理論に基づき語義を記述し、コーパスデータに意味タグ付けを行う。

・2003年度の研究経過

プロジェクト進捗状況

コーパスの拡充を、主に新聞記事データと小説データについて行った。

・新聞記事データ約500万文

・小説データ

日本語の「移動」・「言語コミュニケーション」分野の基本動詞のリストアップ、コーパスデータ収集、アノテーション(コーパス用例文に対する意味タグ付け)の叩き台作成を行った。

デジタル化、教育への還元関連の活動

ホームページ: 国内外にプロジェクトの概要、経過や

近況、成果、メンバー紹介等を発信するため、2003年7月に立ち上げた。その結果、国内外からプロジェクトに関する問い合わせが相次いでいる(共同研究の申し出を含む)。

・<http://www.nak.ics.keio.ac.jp/jfn/index.html>

教育実践に関する活動について。

・以下の授業で、コーパス、辞書編纂学、言語学、フレーム意味論やフレームネットについて、紹介、解説、議論を行った。その結果、フレームネット関連のテーマで卒論や修論を書く学生が出てきている(なお、理工学部大学院「自然言語処理特論」は、理工学研究科国際コースの科目にもなっており、2003年度は国際コースの留学生が1名受講していたため、英語で講義を行った)。理工学部総合教育セミナー「(2002年度秋学期、2003年度秋学期)「究極の辞書をデザインしよう!」

・理工学部大学院(2003年度春学期)「人間科学セミナー」

・理工学部大学院(2002年度秋学期、2003年度秋学期)「自然言語処理特論」

・プロジェクト会議には適宜理工学部学部生・大学院生が参加し、コーパスやコーパス検索用ツールの作成などにも従事した。

成果発表

PACLING '03(国際会議。査読つき。カナダのハリフアックスにて8月22日から25日まで開催)でポスター発表。

・Ohara, Kyoko Hirose, Seiko Fujii, Hiroaki Saito, Shun Ishizaki, Toshio Ohori, Ryoko Suzuki (2003). "The Japanese FrameNet Project: A Preliminary Report." In *Proceedings of Pacific Association for Computational Linguistics* (PACLING '03), 249-254.

『英語青年』9月号に「フレーム意味論とフレームネット」を共同研究者の藤井聖子氏(東京大)と小原とで執筆し発表。

・藤井聖子、小原京子(2003)「フレーム意味論とフレームネット」『英語青年』: Vol. 149. No. 6: 373-376.

ICLC 2003(第8回国際認知言語学会。スペイン、ラリオハ大学にて7月20日から25日まで開催)にて論文発表。

・Ohara, Kyoko Hirose (2003). "Manner of Motion in Japanese: Not Every Verb-framed Language is Poor in Manner Information". Paper presented at the 8th International Cognitive Linguistics Conference. University of La Rioja, Spain.

プロジェクト会議

- 第10回 4/2(木) 15:30-17:30
- 第11回 6/13(金) 15:00-17:15
- 第12回 7/4(金) 14:00-17:15

Berkeley English FrameNet プロジェクトのプロジ
ェクトマネージャー Collin Baker 氏を迎えて

- 第13回 8/14(木) 10:30-13:00
- 第14回 1/16(木) 10:30-12:45

ワーキンググループ内会議

- 8/18(月)
- 9/19(金)

・2004年度の活動予定

2004年4月～5月

「移動」分野の経路動詞のコーパスデータ収集、分析、
アノテーション

2004年5月26日～30日

LREC2004にて成果発表(ポルトガル・リスボン)採択
決定済み)

2004年6月

「移動」分野の様態動詞のコーパスデータ収集、分析、
アノテーション

2004年7月7日～10日

第3回国際構文文法学会にて成果発表(フランス・マ
ルセイユ)採択決定済み)

2004年7月～8月

- ・アノテ - ションツールの作成
- ・「移動」分野のデータチェック
- ・「言語コミュニケーション」分野のコーパスデータ収
集、分析、アノテーション

・データベースの雛形作成

2004年8月末

学術フロンティア最終報告会

2004年9月～11月

「言語コミュニケーション」分野のデータチェック

2004年11月13日、14日

日本英語学会シンポジウムにて成果発表(獨協大学)
(招待受理済み)

2004年11月～2005年3月

- ・linguists による最終データチェック
- ・データベース作成
- ・報告書

・デジタル化に関する今後の予定

成果物である、オンライン語彙情報資源の雛形の作
成。具体的には、「移動」や「言語コミュニケーション」に
関する日本語基本動詞の定義、これらの動詞に関す
る概念(フレーム)辞書、コーパスから抽出し意味情報
を付与したこれらの動詞の用例等を Web ベースで検
索したり表示したりできるようにする。

プロジェクトホームページ(上記参照)に報告書を掲載。

・教育実践に関する今後の予定

2004年度は以下の授業で、コーパス、辞書編纂学、
言語学、フレーム意味論やフレームネットについて、紹
介、解説、議論する予定である。

・理工学部総合教育セミナー(春学期)「理想の国
語辞書とは？」

・理工学部大学院(秋学期)「自然言語処理特論」

プロジェクトへの大学院生のプロジェクト会議への
参加。

大学院生によるコーパス、コーパス検索用ツール、コ
ーパスへのタグ付けツール等の作成、コーパスデータ
の整備、プロジェクト用ホームページの作成。

フレームネット関連のテーマでの卒論、修論指導。

プロジェクトメンバー

小原京子(理工)、大堀壽夫(東大)、石崎(環境情報)、
斎藤博昭(理工)、鈴木亮子(経)、藤井聖子(東大)

異文化共存の可能性と限界 地中海世界
における異文化ネットワークと人口移動
研究代表者 西村太良(文学部)

・研究の目的

今日の国際社会の最も切実な課題は異文化理解と
共存である。本研究プロジェクトでは、その先例となる
モデルのひとつとして地中海世界に存在してきた異文
化間の知的、文化的ネットワークを取り上げ、資料に基
づいてその形成のプロセスと限界を分析すると共にそ
の背景にある人口移動に伴う異文化間の衝突と軋轢
の実相を明らかにしたいと考える。

・研究活動並びにその成果

今年度は研究分担者それぞれの個別研究を進め、学会誌に論文を発表し、また海外の学会においても研究報告をしたほか、下記のように海外の研究者を招聘し、講演研究会、シンポジウムを開催した。

a) 2003.09.22 Christopher Kelly (Corpus Christi College, Cambridge), “A New City for a New Regime

Constantine and the Foundation of Constantinople”

会場：三田 21 世紀 COE 人文研究拠点 会議室

参加者：他大学研究者、大学院生、海外研究者を含む約 20 名

b) 2003.10.02 Susanna Elm (University of California), “Bishops on the move in the Forth Century”

会場：日吉 来往舎

参加者：他大学研究者、大学院生を含む約 25 名

これらの講演研究会の記録は報告書の形で公表される予定である。

・今度の研究予定

今後も海外の研究者との研究会を通じて研究を深め、将来的にはイスラム圏の研究者も含んだ研究組織にしたいと考えている。また、オムニバス授業として学内で公開できることも望ましいと考える。

プロジェクトメンバー

西村太良(文)、McLynn, Neil B(法)、Batty, Roger(経)、高橋通男(言語文化研究所)

大学キャンパスにおける学生の適応の総合的研究 - 慶應義塾大学日吉キャンパスを中心として

研究代表者 木島伸彦(商学部)

・研究の目的

大学 1・2 年生で構成されている日吉キャンパスは、学生にとって新しい生活環境、社会環境そのものである。多くの学生はこの新しい環境に適応して自ら新しい生活態度、社会態度を身につけていくが、少なからぬ学生が、何らかの形で適応に困難を感じているようである。本研究の目的は、大学キャンパスにおける学生の不適応の実態を調査し、それに対処するための教育的方法を見出すことにある。

・研究の内容

- ・適応のタイプと実態の調査
- ・適応への現在の対処法とその課題の発見
- ・さまざまなタイプの適応のよりよい対処法の検討
- ・対処法の実践的実験

・期待される成果

学生が抱える課題のうちいくつかに焦点をあて、その実態を見極めるとともに、その対処法を検討し、実験的に実践することにより、キャンパスでの学生生活をより充実したものにするるとともに、他の大学キャンパスにもそのノウハウを提供したい。

「適応」：大学生が教室の内外、キャンパスの内外で直面する課題状況において、学生が意識しているにせよ、知的、身体的、精神的、心理的に、本人自身と広い意味での外部環境要因との間に生じる何らかの課題に取り組むプロセスを適応とみなす。以下の項目における適応課題について調査する。

- ・学習上の適応
- ・社会生活上の適応
- ・情緒面での適応
- ・文化的適応
- ・発達上の適応
- ・医学的または健康上の適応

・2003 年度の活動報告

当キャンパスにおいては、主に学生総合センター、学生相談室、学事センターなどが学生支援の窓口として機能している。これらの支援が、多種多様で日々変容する学生のニーズに応えるためには、サービス向上、そして新たな学生支援システムの必要性が問われる。そこで、国内外の大学に出向き、学生支援システムに関する有益な情報を入手するために、米国の大学 1 校を含む全 6 校においてヒアリングを実施した。

<ヒアリングの内容>

- ・学業上のこと
- ・心理的なこと
- ・人間関係
- ・心身に関すること
- ・宗教に関すること
- ・悪徳商法の問題
- ・留学生の適応
- ・アイデンティティに関すること など

予防的または発達支援的な性質をもつ、心理教育支援および健康促進的プログラムの提供に向けて、「心と身体のウェルネス」と題したワークショップ(来年度)の企画・準備を進める。

2003年度に国内外の大学キャンパスにおける学生の適応の実態調査を実施した結果、何らかの悩みを抱える学生にその都度対応するだけでなく、予防的要素を兼ね備えた教育的な啓発活動を提供することが、適応や再発を未然に防ぐ効果を持つことが示唆された。こうした結果を踏まえて、2004年度には、『心と身体のウェルネス』と銘打った教育的ワークショップなどを開催して、特に新年度に不安になりやすい新入生のキャンパスにおける心と身体のバランスを促進し、充実したキャンパスライフへの足がかりとしたい。

・2004年度の活動予定

ワークショップ・講演など、予防的で成長発達の活動(学生・教員啓発活動)

これまで受身の授業を受けていた学生が、大学において自発的に自己表現・自己実現の方向へ移行する段階で抱える不安や喪失感に自ら対処できるように、自己コントロール能力の重要性とそのノウハウをワークショップを通して伝えたい。ワークショップには、「こころ」を「からだ」を使って表現・開放させる術に精通しているお二人の講師を招いて、参加者には実際にその場で体験してもらい習得したノウハウを持ち帰り、大学生活を営む上で役立ててもらうことを目的とする。アンケート調査により、関連データを収集・分析して、今後の活動に役立てる。

・「心と身体のウェルネス」と題して、参加型のワークショップを開催する。

・時期：5月の連休後に2回。

・ゲスト・講師：1)山澤直子氏(5月14日); 2)井上ウイマラ氏(5月28日)

キャンパスにおける「憩い・居場所」に関する調査を実施

・アンケート調査の場合には、協力学生に結果を明示できるようにする。

・「学生総合センター」が実施している大学生活実態調査等のアンケートを参考にする。

・既存の施設を利用して、学生の「居場所」をつくりだせないか検討する。

・塾内外のスタッフから、該当スペースの有効利用案(プラン・図案)を募集することも検討する。

・慶應大学の特色のひとつであるインターキャンパス(SFCと日吉、SFCと三田、日吉と三田など)・複合キャンパスという性質を生かして、web上での学生同士の交流やサポートシステムの開発。実際にインターフェースで出会う機会がない学生でも、web上では、学部、キャンパス、サークルといった既存の枠を超えて出会う、支援し合ったりということが可能となる。また、プロジェクト間の連携を図ることで、超表象デジタルの意義を見出す。

教養教育など、カリキュラムにどう関連づけ、のせていけるか。(検討案)

・『人間の尊厳』のようにオムニバス講座のようなものを開設。

・全12～13回で、1区切りを3～4セッションでまとめ、3～4人の講師をお願いするが、バラバラすぎず、統合性を確保するため、たとえば最後に関係講師によるシンポジウムでしめくくる。

・クラス内にとどまらず、実際の生活の中で生かせるスキルの習得を目指す。

VI. まとめ

学生が大学キャンパスにおいて経験すると考えられる孤立・自己喪失感、人間関係における悩み、将来への不安などには「負」の感情と身体症状が伴うとされる。しかし「負」というのは、個人あるいは社会が当てはめた appraisal であり、それらの体験を「正」と定義づけることは可能である。自己の体験をどう認知するかが、その体験に伴う感情や身体症状に影響を与えるとすれば、その「認知」プロセスの部分に働きかけることは大変意義深い。教育的ワークショップ、オムニバス講義などを通して、学生のこうしたメタ認知の部分強化することで、大学生活での体験をよりポジティブに解釈し、その後の成長につながるような布石としたい。また、face-to-faceでのつながり先をさることながら、超表象デジタル(超・キャンパス、超・既存の人間関係)の領域で可能な、ピアサポートのネットワークや、居場所づくりの重要性を鑑みて、それらの可能性を視座に入れた活動を目指したい。

プロジェクトメンバー

木島伸彦(商)、湯川 武(商)、長谷山 彰(文)、手塚千鶴子(国際センター)、森吉直子(商)

色と紋様の総合科学 異分野からのアプローチ

研究代表者 秋山豊子(法学部)

・研究目的

超表象デジタル研究の手法を用いて、異分野の研究者集団による動物の体色発現と紋様形成機構について学際的・総合科学的に解析する。標準化したデータベースを構築・公開する。

・アプローチの手法

異分野からの学際的研究...反応拡散方程式のモデルのような化学・物理・数学の学際的解析法を生物学の現象に応用して、総合的理解を図る。

超表象デジタル研究...色と紋様をデジタル化して、標準化・単純化・モデル化を行い、数値的・画像的な解析を容易にする。

色と紋様のデータベース化...動物種、学名、色、動物種名、学名、体色(できるだけ標準色の表現方法で、単色、複数色の別も)、紋様(斑点、網目模様、縞模様、その他)、全体像の縮図(実際のサイズの記載も)、紋様パターン(必要ならば複数部分から、実際のサイズも記載)それを単純化したモデル、その他、キーワードなど。

・2003年度活動報告

(来往舎210室、公開講座は大会議室にて)

3月24日 準備会合、研究の事前打ち合わせ、研究目的・方向性など討議

6月12日 研究会：研究班員の研究内容の紹介、今後の活動計画、予算執行の計画他。

6月26日 研究会

- ・三井(物理学); 構造色の解析、散乱と反射
- ・鈴木(心理学); 肌における分光特性
- ・小野(生物学); 動物の色を制御する遺伝子
- ・秋山(生物学); 動物における色素細胞の構造と機能

7月17日 研究会

- ・竹中(数学); 数理学から見た動物の斑紋パターンの解析
- ・小瀬村(化学); 化学から見た色物質の構造と機能
- ・福澤(生物学); 両生類における体色発現の仕組み
- ・萱嶋(生物学); 体造りを制御する遺伝子

8月5日 公開講座と研究会

- ・講師; 理化学研究所 近藤 滋氏

・講演タイトル; 動物の体に縞模様を作るメカニズム
参加者: 教員9名、学生12名 合計21名
ビデオ撮影(デジタルテープ、アナログテープあり、塾内公開について許諾取得済)

9月12日 公開講座の総括と検討。小会議室で当日のビデオを見ながら検討を行った。

10月24日 研究会

・竹中(数学)・佐々木(学生協力者); 数理論から見た斑紋パターン形成のシミュレーション

・秋山(生物学); 動物の形態形成と斑紋の関係。横縞と縦縞ができる仕組みへの問題提起

11月19日 研究会

・三井(物理学); 物理学から見た蝶の羽の構造色の機構

12月5日 公開講座と研究会

・講師; 大阪大学生命機能研究科 吉岡伸也氏

・講演タイトル; モルフォチョウの青い輝きの秘密

参加者: 教員11名、学生12名、一般1名 合計24名
ビデオ撮影(デジタルテープあり、塾内公開について許諾取得済)

1月22日 研究会(招待講師による研究班員向けセミナー)

・講師; 慶應義塾大学理工学部情報工学科 大野義夫氏

・講演タイトル; 動物の紋様表現 - CGの立場から講演のパワーポイントファイルあり。

03年秋からデータベース構築準備

・画像取り込み

・処理方法の検討

・インデックス・キーワードの検討

・2004年度の活動計画

各人から各分野(数学、物理学、化学、心理学、生物学)での進展状況の報告(各分野の学会発表など)

学際分野での理解と進展した部分を特に記録し、公開する(公開講座・日吉紀要他)

色と紋様のデータベース化を進める。

成果の一部をHPで公開する。

<http://www.hc.keio.ac.jp/iromoyo>

公開講座を2~3回行い、1部は班員が講演を行う。

・学術フロンティア・プロジェクト全体との関連

「超表象デジタル研究センター」としての最終年に当たっての全体の取りまとめ方針

デジタルで表現することの有利性を示す。

・数万色の色と微細な紋様を正確に表現するにはデジタル信号による記録である事が有利であり、そのためにメディアや印刷機が異なっても、同様の効果を示すように標準化をする事が必要である。

・モデル化・単純化・変化をつけることなども容易である。

・データベース化が容易である。

・多くのコピーを同品質で作成しうる。

・異なる媒体(ビデオ・PCファイル・CD・DVD・フィルム・印刷物)などへ転換が容易である。

・生物の発生に伴って変化する斑紋形成の動きや、色物質の構造変化、数理論からシミュレートされる波の動きなどは、非常に複雑なため、デジタル信号にして計測・解析し、表現することがもっとも効果的である。

異分野からの総合研究であることの意味づけ。

・これまで理解が困難であった部分についても、異分野からの知識や解析法で新たな視点が加わり、理解が進んだこと。

学部・分野横断的な研究組織であるため、教員同士間で新たな人的交流が生じ、実質的な共同研究が進展していること。

プロジェクトメンバー

秋山豊子(法)、竹中淑子(経)、鈴木恒男(法)、小瀬村誠治(法)、福澤利彦(商)、三井隆久(医)、小野裕剛(法)、萱嶋泰成(法)、佐々木誠(理工学部修士)

表象文化論のデータベース化と映像と音響の融合への実験的試み
研究代表者 小瀧昭夫(経済学部)

・ 2003年度の活動報告
表象文化データベース化

フリッツ・ラングの映画、フランス現代映画、短編映画などのDVDを作成した。具体的に列挙すると、cinefil世界の短編映画4巻、A.タルコフスキー「惑星ソラリス」2巻、スタンリー・キューブリック「2001年宇宙の旅」P.ルコント「サンピエールの未亡人」J-P.アメリス「デルフィーヌの場合」V.ミネリ「ボヴァリー夫人」J.ルノワール「マダム・ボヴァリー」フリッツ・ラング「外套と短剣」ルイ・フィヤール「ファントマ」N.フィリベール「パリ・ルーブル美術館の秘密」ヒッチコック「疑惑の影」M.オヒュルス「快樂」ゴダール「恋人のいる時間」オリヴィエラ「クレヴの奥方」J.ユスターシュ「ママと娼婦」トリュフォー「野生の少年」など多数。

通信教育部夏期スクーリング映画上映会(8月23日)「シャンソン×詩×映像×音楽のコラボレーションライブ」では、鶴岡キャンパスで行われている「雷サミット」の布石として、ヴィクトル・ユゴーの詩に基づいた「魔神～LES DJINNS～」という、雷をテーマとしたパフォーマンス・アーツで来場客に深い驚きと感銘を与えた。

鶴岡市のホテル雷屋で和太鼓(演奏・本間廣一氏)の音響サンプリングを行い、パトリック・レポラル氏(南山大学)の詩の朗読を録音し、ヘンデルの「サラバンド」を主旋律として、洋の東西を融合し、実際の雷の轟音(音羽電機工業提供)などをミキシングしてシンセサイザーの音楽とし、ユゴーの絵画、実際の雷の映像に合わせて壮大な交響詩を井口拓磨(経4) 堀太誌(経3) 庄司久人(理工3)が作った。

日吉キャンパスにおいて、「ヒヨシエイジ2003～日吉地域文化交流フェスタ～(10月13日)の企画・運営・実行の立役者として、学生研究員の井口拓磨君が、花火と音楽の融合LIVE「ヒヨシファイアマーク」で、自らデザインした花火を背に、シンセサイザーによる演奏を行い、4000名もの観客に深い感動を与えた。

また、日吉行事委員会(HAPP)の学生企画による秋期イベント「weather map(11月13～14日、責任者・堀太誌君)では、晴れ、雲、月夜、雷、夜空、雪などを映像にヴォーカルを含めてピアノやシンセサイザー、エレキギター、パーカッションの音楽を融合させた。

2003年の横浜市民大学講座「天体宇宙と人間(10

月29日)では、宇宙的な映像と音楽をシンクロさせながら、シンセサイザーで演奏した。

最後に、慶應高等学校の地学教室と協働して、「planeta rhythm～空間宇宙と映像&音楽のプラネタリウムインスタレーション～(12月19日)を、慶應高校プラネタリウム室で行った。

教養としての映画上映会を6回行った。

- (1) 2003年10月3日(金):「海のほとり(監督ジュリー・ロペス・キュルヴァル)2002年・88分
- (2) 2003年10月10日(金):「運命のつくりかた(監督ジャン＝マリー&アルノー・ラリーユ)2002年・121分
- (3) 2003年10月17日(金):「記憶の森(監督ザブー・ブライトマン)2001年・110分
- (4) 2003年11月14日(金):「愉快的フェリックス(監督ジャック・マルティノー)
- (5) 2003年11月28日(金):「惑星ソラリス(監督アンドレイ・タルコフスキー)
- (6) 2003年12月5日(金):「誰がパンピを殺したの?(監督ジル・マルシャン)2002年・125分

6回の映画上映会はずべてアンケートを取ったが、現代フランス映画への関心が顕著に示されていた。問題点として、これらの上映会の宣伝・広報をどうするか、が課題である。慶應HPに掲載すること、学内でのチラシ、ポスターの配布方法、地域住民への広報をどうするか、学生にイニシアティブを持たせることもよいのではないかと思われる。

・ 成果と課題

映画のDVD化によって、表象文化論の授業に活用できたことは成果であった。今後は、より綿密に、映画史との関係において収集することが肝要だと思われる。関連論文として、藤崎康「フリッツ・ラング、またはマブゼ 博士の呪い(日吉紀要ドイツ語学・文学第37号、2003年)がある。

以上の活動成果として、DVD「魔神 LES DJINNS」と「weather map」の制作があげられる。「魔神 LES DJINNS」をさらにブラッシュアップして、山形県鶴岡市での「雷サミット」でライブ演奏がなされた(3月20日)。小瀧昭夫「ヴィクトル・ユゴーと雷の詩学(日吉紀要フランス語フランス文学 No.38、2004年)

今後の活動としては、さらに持続的に行うことで、一定の成果が期待されるであろう。

近代日本の衛生統計と疾病地理学 FCRONOS による

研究代表者 鈴木晃仁（経済学部）

本年度の研究活動は、前年度、あるいはそれ以前から蓄積してきたデータを用いて、学会などの場で成果を世に問い始めること、さらにデータの蓄積を行うこと、の2種類に大別することができる。

・成果の発表

まず、2003年5月に九州大学で開かれた日本医史学会でプロジェクトとして合計4つの報告を行った。ジフテリア、腸チフス、天然痘といった個別の病気に関して各1本と、データベース構築の方法論的な議論が1本である。これらの報告の内容は、以下のHPにPDFファイルでアップされている(永島剛「日本に於ける腸チフス統計分析のための予備的概観」、鈴木晃仁「近代日本におけるジフテリア疾病統計の分析(第一報)

死亡の地域差と血清の疫学的な効果」、市川智夫「近代日本における天然痘および種痘の統計分析1900-1951」、平山勉「近代日本の時系列統計におけるメタデータの構造とデータベースの構築」)。

<http://www.fcronos.gsec.keio.ac.jp/home.html>

2003年11月には、プロジェクトとして初めて国際学会でふたつの報告を行った。ボルティモアにおいて開かれたSocial Science History Associationの年会における、日本のペストの流行と、東京の腸チフスについての報告である。

どちらの報告の内容も、上記のHPにアップされている(Makoto Sakaguchi et.al., “Death in the Japanese Venice:Plague and its control in Osaka 1905-1910”; Takeshi Nagashima and Akihito Suzuki, “Water, Sewage, and the Metropolis:Typhoid Fever in Tokyo 1912-1940”)である。

それ以外にも、永島による第4回日英歴史家会議における日本の公衆衛生の進展のパターンに関する報告、鈴木による一橋大学・経済発展研究会における麻疹の流行に関する報告など、多くの報告を行うことができた。前者は上記HPにその概要が掲載されている(永島剛「疾病情報と近代衛生行政：イギリスおよび日本についての概観」)。

これを総括すると、学会などの報告については、プロジェクト全体で8本と満足すべき数と質の成果を上げている。これらを踏まえた学術誌への掲載について

も、現在国際誌に投稿中の論文が2本あり、来年度にはレフリー制の雑誌への発表も本格化させる予定である。

・データ蓄積の継続

近代日本の衛生情報の包括的なデータベースの構築がこのプロジェクトの最大の眼目であり、完成した暁には、今後のすべての研究の出発点となるベンチマークであるので、若干詳しく説明する。2002年度に入力したデータのうちでもっとも重要なものは、法定伝染病(ペスト、コレラ、ジフテリア、赤痢、腸チフス、発疹チフス、パラチフス、痘瘡、流行性髄膜炎、しょう紅熱)の、各年ごとの府県別の死者数・患者数であった。

これらは法定伝染病という性格上、衛生統計という制約の中ではもっとも精確な数値が期待できる基本的なデータである。しかし、死亡者数全体の中では、これらの疾病は必ずしも数的に重要な死因ではなく、死亡の構造全体を見渡すことはできない。そのため、本年度は「死因統計」というきわめて大量かつ複雑な構造を持つデータの入力と整理を行った。

最大60種類以上もの死因について、年度別・府県別の死者を挙げているデータである。このデータをデータベースに移行し、あと数週間でデータベースとして形を成すところまでこぎつけたのが、今年度のデータの蓄積の最大の成果であった。それ以外には、1900年以前の法定伝染病の患者数・死者数、人口推計数、船舶検疫、医師数、種痘接種の善感者数、麻疹の月別死亡者数などのデータ入力を了えた。

・来年度への展望

成果を発表し、データが蓄積されるにつれて、プロジェクトに関する問い合わせも多くなった。医学における疫学研究者からデータベースを見学したい、若い歴史系の院生を中心に、プロジェクトに参加したい、といった反応があり、確かな手ごたえを感じている。

この期待にこたえるためにも、来年度は、すでに「伝染病流行記事」の資料集の刊行などの予定、いくつかの国際学会での発表が内定しているが、それにくわえて、学会報告と学術誌への成果の発表をさらに行い、年齢階層別死因やコレラの伝播などについての大きなデータを入力する予定である。また、若い院生を中心に日吉でセミナーなどを開き、プロジェクトの拡大を目指したいと考えている。

20世紀初頭の日本におけるメディア革命の比較文化理論的研究

研究代表者 和泉雅人(文学部)/ 識名章喜(商学部)

2003年度の活動報告

2003年11月19日から22日までジエゲン大学で開催された研究シンポジウム「黒澤明とその時代」の企画遂行を主な活動とした。シンポジウムは、ドイツ・ジエゲン大学メディア美学研究所と慶應義塾大学独文学専攻をはじめとする国際共同プロジェクト「メディア革命(Medienumbürche)」の分科会(テーマ:メディア人類学とメディア・アヴァンギャルド)として、文部科学省科学研究費研究助成その他関係諸機関の支援を受けて実現した(DFGプロジェクトNo. A1. Medienanthropologie und Medienavantgarde、科研費における研究課題名: 20世紀初頭の日本におけるメディア革命の比較文化理論的研究。課題番号14310215)ものである。全体は 映画批評家・メディア美学研究者による研究発表(研究発表使用言語:独語、講演:独語通訳付き)、作品上映(英語字幕)、元黒澤組スタッフによる座談会(独語通訳付き)、の3部構成からなる。この3企画に加え、ジエゲン大学付属図書館展示ロビーにおいて「Akira Kurosawa—Eine Ausstellung zu Leben und Werk des japanischen Regisseurs(監督黒澤明 - その生涯と作品)」と題した回顧展が設置された(11月18日~12月11日。主要参加者・発表者は、以下の通りであった。

主要メンバー:

佐藤忠男(映画批評家、日本映画学校校長。基調講演者)

野上照代(黒澤プロダクション・マネージャー。スタッフ座談会参加者)

村木与四郎(美術監督。スタッフ座談会参加者)

出目昌伸(映画監督。スタッフ座談会参加者)

識名章喜(慶應義塾大学教授。研究発表者)

Nicola Glaubitz(ジエゲン大学メディア美学研究所研究員。研究発表者)

Hyunseon Lee(ジエゲン大学メディア美学研究所研究員。研究発表者)

Winfried Günther(映画批評家、フランクフルト映画博物館。研究発表者)

和泉雅人(慶應義塾大学教授。プロジェクトMedienanthropologie und Medienavantgarde日本側研究代表。座談会司会者)

山口祐子(慶應義塾大学非常勤講師。企画・運営事務担当者。通訳者)

Mechthild Duppel-Takayama(DAAD東京支部副所長、慶應義塾大学非常勤講師。通訳責任者)

Ute Schmidt(明治学院大学有期専任講師、慶應義塾大学非常勤講師。通訳者)

Ralf Schnell(ジエゲン大学教授。DFGプロジェクト研究代表)

K. Ludwig Pfeiffer(ジエゲン大学教授。プロジェクトMedienanthropologie und Medienavantgarde 研究代表。コーディネーター)

英語共通カリキュラムにおける教材・テスト・教育方法

研究代表者 松岡和美(経済学部)

2003年度の活動報告

昨年度の活動を継続させる形で、Faculty Development(FD)活動、英語カリキュラムの充実と教材の開発、HP運営を行った。2003年度の活動の成果は以下の通りである。

1. 英語教員 Faculty Development ワークショップの開催

英語教員のFD活動の一環として、昨年度に引き続き、2度にわたって教授法ワークショップを開催した。2003年7月15日にNational University(カリフォルニア州レディング)のアリス・シャーパー教授を招き、スピーキング教授法のワークショップを行った。内容は、学生が自発的に発言しやすいクラス運営の方法、教員が体験しがちな問題とその解決法、教室内で利用できるアクティビティの紹介である。2004年1月24日には、東京薬科大学のエリック・スカイヤ教授を招き、critical thinking とディスカッションの教授法に関するワークショップを開催した。どちらのワークショップでも、参加者が小グループに分かれて自分たちの教授体験を分析したり、実際の教材を用いて指導法を考えて簡単な発表を行うなど、双方向型の運営がなされた。両ワークショップにおいては「英語Study Skills」「英語セミナー」「英語リーディング」を担当している教員の積極的な参加があり、専任および非常勤の教員間の情報交

換・交流の機会にもなった。これらのワークショップで紹介された方法に基づき、英語セミナーにおけるスピーキング・リスニング指導のさらなる充実をはかる方針である。

2. 教材調査・副教材開発グループ活動の継続

共通英語必修科目「英語 Study Skills」の運営においては、2003年度のアンケート調査を通じた英語クラス教材・学生ニーズの分析にもとづき、主教材である2004年度の学生用ハンドブックの改訂を行った。学生のニーズにあったプレゼンテーション用の教材開発の一環として、プレゼンテーション指導部分のページを教員グループが新たに執筆した。そこに盛り込まれた内容には、スピーチ時の極度の緊張を乗り越えるためのアドバイス、ボディランゲージ(姿勢・目線・話し方)や題材の選択、スピーチの構成に関する詳しい説明、よく使われる表現集などがあげられる。教員の指導用補助教材や、授業配布資料も改訂を行い、内容をさらに充実させた。また昨年度作成を開始した「英語セミナー」教員向けハンドブックについては、専任教員のフィードバックをもとに改訂版を用意し、2004年度の春学期に、専任および非常勤教員に配付する予定である。

3. 学習支援ホームページの運営と改善

2003年3月に立ち上げた経済学部英語クラスHPは、より利用しやすいサイトを目指して今年度に大幅なデザイン変更を行い、内容をさらに充実させた。今年度新たに追加した項目は、英語自習用サイトへのリンク・FD活動等の報告・英語科目推奨履修パターンなどである。担当教員・開講クラス・推奨辞書の情報などは定期的に更新を行っている。さらに、例年実施しているアンケートにおける学生のコメントを利用して、「学生からのアドバイス」をより最新のものに更新する作業も進行している。今年度のアクセス件数は累計1万を超えており、このHPへの関心が高いことがうかがえる。

(* 経済学部英語クラスURL: <http://www.hc.keio.ac.jp/econeng/index.htm>)

4. カリキュラム改善のための実験シラバスの使用

今年度は共通必修科目「英語 Study Skills」においてマテリアル導入の順番を変更した「A」「B」の2種類のシラバスを導入した。Aシラバスは従来型の構成で、リーディング/ライティングと平行してプレゼンテーシ

ョンを教えるものである。それに対してBシラバスは、春学期の前半にリーディング/ライティング、後半にプレゼンテーションの指導という、「各スキル集中型」の新しい形態をとっている。期末試験が終わった段階で、それぞれのシラバスを体験した学生にアンケート調査を行った。両方のシラバスとも学習者の肯定的評価を得たことから、2004年度にも両方のシラバス利用を継続することが決定された。今後はより詳細な分析を行う予定である。

高次生命現象理解のための 細胞行動データベースの作製 研究代表者 金子洋之(文学部)

私立大学経常費補助金特別補助の「教育学術データベースの開発」の支援に基づく本プロジェクト(タイトル:高次生命現象理解のための細胞行動データベースの作製)は、細胞が生命の最小単位であることに着目し、『どの種類の細胞が(主語)』、『どの様な状況下で、或いは何を感知して(インプット)』、『どういった反応を行う(アウトプット)』というフォーマットで、高次生命現象と細胞行動を体系化することを行う。この様なアプローチにより、現代の生命科学が明らかにしつつある分子生物学的な情報データベースと本データベースが密接にリンクし合うことも可能になり、将来的には、高次生命現象を、細胞、分子の両レベルでより包括的に洞察していくための強力な知的道具にもなり得る。また、本データベースには、文系の言語学に端を発し、コンピュータサイエンスに汎用されているオントロジーの概念を導入することを試みる。さらに、完成した細胞行動データベースを元に、人間社会における人間行動と細胞行動を対比させたいと考えている。この様な試みから、理系の学問領域である生命科学をより学際的な学問へと成長させる試金石になると期待される。

・2003年度の活動報告

本プロジェクトでは、数多くの科学論文や成書から、高次生命現象をあらゆる記述法で描いている細胞動態を、上記のフォーマット(『主語』、『インプット』、『アウ

トプット』)を用いて、細胞行動の情報として収集することを行っている。同時に、細胞行動を可視化し、その細胞行動の画像を加える方法も併用している。さらに収集した情報をより精度が高いものに昇華するため、審査基準を明確にする一方、複数名の審査員の導入を進めている。本プロジェクトを開始して2年目にあたる本年度は、1年目に開発したデータベース用入力システムに新機能を付加しつつ、収集した情報を入力することを開始している。この様に試行錯誤を続け、かつ慎重な作業の仕方であるがゆえ、本年度に予定していた2000件の情報を完成することには到っていないが、情報の蓄積は着実に進んでいる。なお、本プロジェクトの中心課題のひとつである文系と理系の学問領域の融合を目指す第一歩として、総合教育セミナーにおいて開講した「高次生命現象理解のための細胞行動データベースの作製」で8名の学生に演習形式の講義を行った。その結果、文系の学生にも本プロジェクトの主旨を十分理解させ得ること、ならびに理系のみならず、文系の学生にも本プロジェクトへの参画は可能であるとの感触を得ることができた。

・2004年度の活動予定

このような現状のもと、来年度以降は情報数を飛躍的に増加させ、公開に向けたデータベースとして、その実体を浮かび上げらせ得ると期待している。さらに上記した総合教育セミナーの特別講師として招聘した理化学研究所、脳神経チームの岩爪道昭博士の講演に基づくオントロジー概念(言語学)を本データベースに導入することにより、より体系化された検索のみならず各現象間、また各要素(主語、入力、出力)間の関係を明らかにする試みに着手することも2004年度の具体的な目標に上げたいと思っている。また、総合教育セミナーを継続し、本プロジェクトが十分に教育システムの材料と成り得ることを検証していきたいと考えている。

本年度の学会報告等

- ・日本動物学会第74回大会
タイトル;細胞行動データベース(金子洋之、中島陽子、団まりな; 発表演者)
2003年9月27日発表、於函館
- ・通信教育講師派遣
タイトル;高次生命現象理解のための細胞行動データベース(金子洋之)
2004年1月18日講演、於大阪

行動遺伝学の方法を援用したパーソナリティの構造の解明に関する研究
研究代表者 木島伸彦(商学部)

・プロジェクトの概要

従来、多くのパーソナリティ理論が提出され、それに伴い、測定方法も乱立してきた。近年になって、統計的手法が確立され、統計的解析から妥当と考えられるパーソナリティ理論と測定方法が確立されている。しかし、この統計的解析に基づいた手法は、得られたデータにおいて統計的に妥当であるだけであり、パーソナリティの理論としては、十分なものとは言い難い。

こうした流れの中で、生物的基盤に基づいたパーソナリティ理論と測定方法も開発されてきている。この生物的基盤に基づいたパーソナリティ測定方法は、逆に統計的妥当性に欠ける部分がある。

そこで、本プロジェクトでは、統計的に妥当とされるパーソナリティ測定法と生物的基盤に基づいたパーソナリティ測定法の両方の測定法を、双生児を対象とした行動遺伝学的手法を取り入れて調査・解析し、統計的に妥当でかつ、遺伝子との関連性をより明確にしたパーソナリティ測定法を開発することを目的とする。

・2003年度の活動報告

日本学術振興会の科学研究費補助金(課題番号:14710096、若手研究(B)行動遺伝学的手法を援用したパーソナリティ理論と測定法の構築に関する研究)を得て、双生児を対象に質問紙調査を行った。この質問紙調査では、国際的に最も用いられていて統計的に妥当であるとされているNEO-PI(NEO Personality Inventory)と遺伝子多型との関連性が多く研究され生物学的基盤のあるTCI(Temperament and Character Inventory)を用いた。

・2004年度の活動計画

2003年度に得られたデータを基にデータ解析し、この調査により得られた成果は、順次国際学会および国際誌に発表予定である。

さらに、2003年度に用いた尺度だけではなく、より広範なパーソナリティ尺度を用いて、より精緻なパーソナリティ尺度の開発を目指した質問紙調査を双生児を対象に行う。

解析的整数論の諸相

研究代表者 桂田昌紀（経済学部）

1. 研究成果解説（研究代表者に関連したもの）

以下 $s = \sigma + it$ を複素変数、 $x > 0$ を実数パラメタ、 $\zeta(s, x)$ で級数 $\sum_{n=0}^{\infty} (n+x)^{-s}$ を全 s 平面上の有理型関数に接続して得られるフルヴィッツゼータ関数を表す。リーマンゼータ関数 $\zeta(s) = \zeta(s, 1)$ は、領域 $\sigma > 1$ においてオイラー積表示 $\zeta(s) = \prod_p (1 - p^{-s})^{-1}$ (p は素数全体を互る) を持つが、この表示を通じて $\zeta(s)$ の臨界帯 $0 < \sigma < 1$ における挙動が自然数列中の一見無秩序に見える素数の分布を統御することが、リーマンによって約 150 年前に発見された。それ以来 $\zeta(\sigma + it)$ や、これを平均化した $\int_0^t \zeta(\sigma + it) dt$ の $t \pm i$ における挙動の研究がさまざまな方向に深められてきた。

ところで、 $\zeta(s, x)$ は $\zeta(s)$ の各項を x だけ fluctuate させたものと考えられる。研究代表者は以前、パラメタ x に関する平均 $\int_0^1 \zeta(s, a+x)^2 dx$ ($a > 0$ は任意定数) の $t = \mathfrak{I} s \pm i$ における完全漸近展開を導いた ([Collect. Math. 48 (1997)]) が、最近これを統計的な観点から一般化し、多重平均 $\int_0^1 \cdots \int_0^1 \zeta(s, a+x_1 + \cdots + x_m)^2 dx_1 \cdots dx_m$ ($m = 1, 2, \dots$) についても同様の完全漸近展開が存在することを証明した。さらに、 $z = x+iy$ を複素パラメタとするとき、 (u, v) の正値二次形式 $Q(u, v) = |u+ivz|^2$ に対応して、そのエプシュタインゼータ関数 $Z^2(s; z)$ が $Z^2(s; z) = \sum_{m, n} Q(m, n)^{-s}$ ($m = n = 0$ となる項を除く) およびその全 s 平面上の有理型関数への接続として定義され、(整数論的) 二次形式の研究に重要な役割を果たしている。研究代表者は最近、 $Z^2(s; z)$ 及びその (ポアソン分布型重み付平均ともみなせる) ラプラス・メルン変換に対し、それらの $y = \mathfrak{I} z + i$ における完全漸近展開を導いた。

上で得られた結果は、いずれも、ゼータ関数の積分変換の漸近的挙動の解析という、これまであまり顧みられなかった新たな研究の方向性を示唆している。そこで今後は、上に示唆された問題意識をさらに深化発展させるべく、ゼータ関数の種々の積分変換の定式化とその漸近挙動の解明を中心に研究を進めたい。

2. 主な研究成果

学術論文

- Amou, M. and Katsurada, M., Irrationality results for values of generalized Tschalkaloff series II, Journal of Number Theory, 104 (2004), 132-153.
 - Amou, M. and Väänänen, K., Linear independence of the values of q -hypergeometric series and related functions, The Ramanujan Journal, (in press).
 - Amou, M. and Väänänen, K., On linear independence of the theta values, Monatshefte für Mathematik, (in press).
 - Amou, M. and Bugeaud, Y. Sur la separation des racines des polynomes et une question de Sprindzik, The Ramanujan Journal, (in press).
 - Katsurada, M., Asymptotic expansions of certain q -series and a formula of Ramanujan for specific values of the Riemann zeta-function, Acta Arithmetica 107 (2003), 269-298.
 - Katsurada, M., An application of Mellin-Barnes type of integrals to the mean square of Lerch zeta-functions II, (submitted for publication).
 - Katsurada, M., Complete asymptotic expansions associated with the Epstein zeta-function, (submitted for publication).
- #### 学会発表等
- Amou, M., Arithmetic properties of certain q -series, International Conference on Diophantine analysis, uniform distributions and applications, 2003 年 8 月, Minsk, Belarus.
 - Amou, M., Irrationality results in q -series, The Third China-Japan Seminar on Number Theory, 2004 年 2 月, Xi'an, China.
 - Katsurada, M., Asymptotic expansions of a multiple mean square of Lerch-zeta functions, 日本数学会年会, 2003 年 3 月, 東京大学.
 - Katsurada, M., Complete asymptotic expansions associated with the Epstein zeta-function, 日本数学会秋季総合分科会, 2003 年 9 月, 千葉大学.
 - Katsurada, M., Complete asymptotic expansions associated with the Epstein zeta-function II, 日本数学会年会, 2004 年 3 月, 筑波大学.
 - Katsurada, M., Asymptotic expansions of certain q -series and Ramanujan's formula for $\zeta(2n+1)$, 日本数学会年会, 2003 年 3 月, 東京大学.

・ Nagata, M., *G-functions, G-operators, and Diophantine approximations*, 短期共同研究「微分方程式と力学系における数論的現象の研究」2003年9月10日-12日、京都大学数理解析研究所。

地域文化振興および社会教育と芸術ホール 日本の公立芸術ホールと米国大学ホールの比較考察

研究代表者 中矢一義（法学部）

本研究は、地域社会における芸術文化の役割に目を向け、芸術ホール事業を、地域振興と社会教育の観点から評価し、かつそれを米国の先進例と比較するものである。日本の芸術ホール研究の領域では、今回は独自の文化振興財団を持つか、もしくは文化振興事業に関わる専属スタッフを配置するなど、積極的な文化振興行政を展開している公的機関を研究の対象とする。また、米国の大学は、独自のホールをもち、地域コミュニティ、生涯学習の観点から、先進的な活動を行っている大学をと対象としている。文化振興を民間主導としている米国においては、この種の活動を大学が担っているからである。これによって、我が国における芸術ホール事業運営理念の再構築を目指す。

2003年度の活動報告

2003年度においては、過去3年間に調査した諸項目を整理し、データ蓄積作業を主に行った。これまで発展させてきた公立芸術ホールの活動マトリクスとその評価のあり方について試論をまとめ、研究報告書とともに公表する予定である。

新たに調査を行った場所は、静岡県、沖縄県、京都府であった。調査結果は、これまでのデータ同様、分析を行い、研究報告に反映させる予定である。

従来、芸術文化事業運営は、個々の事業主体の個別の経験をもとに、場当たりの行われてきたきらいがある。しかし、本研究においては、芸術事業運営に関するさまざまなデータを蓄積し、それらを米国の先進例と比較することによって、今後ますます重要になってくることが予想される社会教育プログラム開発への指針とすることができる。公立芸術ホールは、今日、以前

にも増して行政のアカウンタビリティを求められているが、本研究はそのガイドラインを提供する。それと同時に、大学のリベラル・アーツ教育における、芸術や音楽のあり方、また大学の社会との対話のあり方にひとつのモデルを提示することを最終的に目指している。

数理解析とその周辺

研究代表者 池田薫（経済学部）

昨年秋、慶應義塾大学の「統合数理科学：現象解明をとおした数学の発展」はCOEに選定された。本プロジェクトの構成員のなかでもこのCOEプログラムにかかわりを持っているものがあるためその関連について多少述べたい。まず本プロジェクトの一環として始まった代数解析セミナーは今年度からは上記COEプログラムの中のセミナーとして位置づけられることになった。本プロジェクトから外れたことは多少残念なことではあるがただ日吉の駅から至近である来往舎を数学の研究集会等に有効に利用することは本プロジェクトの趣旨に沿うものと思われるためこの1年の代数解析セミナーの活動状況を紹介しよう。

2003年11月29日、日本大学の乙藤隆史氏に無限次元グラスマン多様体と量子コホモロジーのタイトルで講演していただいた。同年12月13日に横浜市立大学の水町徹氏に Asymptotic stability of solitary wave solutions to the regularized long wave equation のタイトルで講演していただいた。2004年1月17日、大阪大学の山根宏之氏に A Serre-type theorem for the elliptic (super) algebra with rank 2 and related topics のタイトルで講演していただいた。同年1月24日、京都大学の高崎金久氏に Tyurin パラメーターと可積分系のタイトルで講演していただいた。同年2月7日に東京大学の井上玲氏にアファイン Jacobi 多様体の行列実現と Lotka-Volterra 格子の代数解析的完全可積分性のタイトルで講演していただいた。

以上は可積分系というテーマを底流としてそこに交錯するさまざまな数学の諸現象のなかからその中に見出すことのできる代数的で普遍的な枠組みを抽出していく過程の最先端の研究報告である。くどいようだがこの代数解析セミナーはCOEプログラムの一環であ

り研究プロジェクト「数理解析とその周辺」とは無関係である。しかし数学研究において日吉発の情報を発信していくという今回の研究プロジェクトの趣旨には合致するため今回報告させていただいた。

さらに今年3月に入ってから COE プログラムの一環として大規模な非可換幾何学と物理学に関する国際学会がこの来往舎において開催された。また COE ではないが昨年秋には中規模の非可換幾何学シンポジウムも開かれた。何度もいうが本プロジェクト「数理解析とその周辺」の目的のひとつは数学の研究拠点としての日吉キャンパスの有効活用である。この日吉キャンパスには学部は違っても多数の数学研究者が在籍しており、また来往舎が日吉の駅から至近であることから外部の研究者との交流の拠点となり得る可能性をもっている。その証拠に来往舎での研究集会はいずれも盛況であった。こうした研究集会で2階の研究室は参加者同士のディスカッションの場あるいは一時的な荷物置き場として有効に利用された。

現在数学研究は大きな広がりを持っている。たとえば、私が専門とする可積分系の研究でも表現論、代数幾何学、シンプレクティック幾何学、特異点理論などの知識が不可欠である。こうした状況は個人が思索を重ねて築き上げるといった従来の数学の研究スタイルを何人もの人たちによる知的な共同作業という形に変化させつつある。高度にまた大きな広がりを持ってしまったためこれからの数学はもう個人の手に残るといふことであろうか。インターネットを始めとしたIT技術の進歩により情報は世界中から瞬時に入手できる。しかし直接人と会い議論することは数学の研究を深める上でこの上ない機会であることは論を俟たないであろう。本年度の研究プロジェクト「数理解析とその周辺」は数学研究を軸としてさまざまな人と人との交流を生み出した。この交流が何年か後に別の大きなうねりとなり数学研究の発展に寄与することを期待し活動報告を終えることとしよう。

港北区民講座

「実践講座：DNAとナイロンの実験をしてみよう！」

受講者アンケート結果

回答 23 名 (参加者 28 名)

A. 年齢区分

1. 小学生	10
2. 中学生	0
3. 高校生	0
4. 一般	13

B. ビデオ上映

1. おもしろかった	11
2. 少しおもしろかった	8
3. ふつう	4
4. つまらなかった	0

C. DNA の実験

1. おもしろかった	18
2. 少しおもしろかった	5
3. ふつう	0
4. つまらなかった	0

D. ナイロンの実験

1. おもしろかった	19
2. 少しおもしろかった	3
3. ふつう	1
4. つまらなかった	0

E. 今回の講座「DNAとナイロンの実験をしてみよう！」に対して、ご意見があれば何でもお書きください。

- ・分子のモデルが作りたかった。(小学生)
- ・DNAの説明をてがるにしてほしい。(小学生)
- ・ゆびに薬のあわがあたったりしたけど、糸をつくれたり、ねばねばしていたりして、とてもおもしろかった。(小学生)
- ・ナイロンの合成の原理も教えていただければ良かったです。保護具はした方が良くと思います。(保護手袋等)(一般)
- ・知識として知っていた事を実際に自分の手でやってみるとこの体験は非常に楽しく、有意義でした。事務局、先生方に感謝します。(一般)
- ・とても良い講座でした。又、参加したいです。(一般)
- ・普段、経験できない体験ができて楽しかったです。どうも、ありがとうございました。(一般)
- ・DNAの実験は、先生の説明が面白く、細部まで、く

わしく手順がよくわかり、楽しくできました。

ナイロンの合成は、2種類の液体から膜ができ、糸になるのがふしぎでした。染色も楽しかったです。(一般)

・ふだん触れることのない実験用具、薬品の数々にちょっとドキドキ緊張しましたが、形となって表われると驚きと嬉しく感じました。貴重な体験ありがとうございました。(一般)

・タンパク質の実験の意味がわからない。説明不足なので何していいかわからない。(一般)

・こんな楽しいとは思っていなかった。もっと沢山の親子が来ていると思っていたが、もったいないですね。(一般)

・ナイロンの実験では、これからやろうとしていることと、実際の「暮らし(生活)」の中で経験していることとの関連を具体的に示していただくとよりわかりやすいと思いました。(一般)

F. 今後、港北区民講座として取上げてほしいテーマがあれば、書いてください。なお、去年は「ウォーキング」、今年は「実験」と、実践型の講座を考えています。

・中学生向きの物(国語)(小学生)

・昔の遊びみたいなもの(小学生)

・大学構内の見学とか研究紹介とか good!(一般)

・今回のような実験はまたなにか行ってほしいです。(一般)

・芸術についてもやってほしいです。(絵、音楽、踊り等)実践型ではないのかな?(一般)

・日頃は入ることのできない大学の実験室で大学の先生のご指導のもと、実験ができたのが良かったです。(一般)

・ガーデニング、パンづくり、お菓子づくり、ピーズなど。(一般)

・古代米、紫色のいも、など色のきれいな野菜の染色をしてみたい。(一般)

・ぜひ今後も続けてください。子ども(小学生)向けの講座は、夏休みのはじめにやってくださると自由研究にもなると嬉しいです。(一般)

教養研究センター 規程

第1条（設置）慶應義塾大学(以下「大学」という。)に、慶應義塾大学教養研究センター(Keio Research Center for the Liberal Arts, 以下「センター」という。)を置く。

第2条（目的）センターは、多分野・多領域にまたがる内外の交流・連携に基づく教養研究活動を推進することで、知の継承と発展に貢献することを目的とする。

第3条（事業）センターは、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- 1 教養研究を中心とした知の継承と拡大、発展に資する研究活動
- 2 教養研究活動に基づく学内外の交流活動の企画、支援
- 3 教養研究活動への助成および支援
- 4 教養研究活動状況の把握と情報の収集および発信
- 5 その他センターの目的達成のために必要な事業

第4条（組織）センターに次の教職員を置く。

- 1 所長
- 2 副所長 若干名
- 3 所員 若干名
- 4 研究員 若干名
- 5 事務長
- 6 職員 若干名

所長は、センターを代表し、その業務を統括する。

副所長は、所長を補佐し、所長に事故あるときはその職務を代行する。

所員は、原則として兼担所員とし、センターの目的達成のために必要な研究および職務に従事する。

研究員は、特別研究教員(有期)または兼任研究員とし、所長の指示に従い研究に従事する。

国内および国外の大学、専門研究機関からの派遣研究者に関しては、別に訪問研究者を置くことができる。

事務長は、センターの事務を統括する。

職員は、事務長の指示により必要な職務を行う。

第5条（運営委員会）センターに運営委員会を置く。

運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 1 所長
- 2 副所長
- 3 事務長
- 4 大学各学部長
- 5 大学各学部日吉主任
- 6 日吉研究室運営委員長
- 7 日吉メディアセンター所長
- 8 日吉ITC所長
- 9 日吉キャンパス事務長
- 10 その他所長が必要と認めた者

委員の任期は役職で選任された者はその在任期間とする。その他の者の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

運営委員会は所長が招集し、その議長となる。

運営委員会は、次の事項を審議する。

- 1 センター運営の基本方針に関する事項
- 2 センターの事業計画に関する事項
- 3 研究プログラムの企画・運営等に関する事項
- 4 人事に関する事項
- 5 予算・決算に関する事項
- 6 コーディネート・オフィスに対する付託事項
- 7 その他必要と認める事項

第6条（コーディネート・オフィス）センターの事業活動を円滑かつ効率的に遂行するためにコーディネート・オフィスを置く。

コーディネート・オフィスは、所長、副所長、事務長およびコーディネーター若干名をもって構成する。

第7条（小委員会）運営委員会は、必要に応じて小委員会を置き、第5条第5項に定める審議事項の一部について審議を付託することができる。

第8条（教職員の任免）センターの教職員等の任免は、次の各号による。

- 1 所長は、大学評議会の議を経て塾長が任命する。
- 2 副所長、所員および兼任研究員は、所長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て塾長が任命する。
- 3 特別研究教員(有期)については、「任免規程」の定

めるところによる。

4 訪問研究者については、「塾外学者に対する職位規程」の定めるところによる。

5 事務長および職員については、「任免規程」の定めるところによる。

6 コーディネーターは、所員及び職員の中から所長が委嘱する。

所長、副所長の任期は2年とし、重任を妨げない。ただし、任期の途中で退任した場合、後任者の任期は前任者の残任期間とする。

所員の任期は2年とし、重任は妨げない。

兼任研究員の任期は、第9条に定める研究プログラムの研究期間とする。

第9条（研究プログラム） センターに次の研究プログラムを置く。

1 基盤研究：専任教員が核となって展開する、教養研究を中心とした共同研究で、運営委員会が審議、採択したもの。

2 一般研究：個人研究ならびに共同研究で、センターが必要と認めたもの。

3 特定研究：運営委員会の議を経て、センターが企画、立案、募集したもの。

研究プログラムの企画・募集・選定・管理・統括等の詳細については、運営委員会で別に定める。

第10条（契約） 外部機関等との契約は、慶應義塾の諸規程等に則り行うものとする。

学内機関等との契約は、運営委員会の議を経て所長が行うものとする。

第11条（経理） センターの経理は「慶應義塾経理規程」の定めるところによる。

センターの経費は、義塾の経費、委託研究資金、国または地方公共団体等からの補助金、寄附金およびその他の収入をもって充てるものとする。

外部資金の取扱い等については、研究支援センターの定めるところによる。

第12条（規程の改廃）この規程の改廃は、運営委員会の審議に基づき、大学評議会の議を経て塾長が決

定する。

附 則(2002年7月2日)

この規程は、2002年7月1日から施行する。

この規程は、施行後3年を目途に見直すものとする。

教養研究センター

運営委員会委員(敬称略)

任期: 2002年7月1日~2003年9月30日 第1期

教養研究センター	所長	羽田 功	
	事務長	宮木 さえみ	
	副所長	浅川 順子	2003年3月まで
	副所長	小湊 昭夫	
	副所長	木俣 章	
	副所長	近藤 明彦	2003年4月から
文学部	学部長	西村 太良	
経済学部	学部長	細田 衛士	
法学部	学部長	森 征一	
商学部	学部長	十川 廣國	
医学部	学部長	北島 政樹	
理工学部	学部長	稲崎 一郎	
総合政策学部	学部長	小島 朋之次	
環境情報学部	学部長	熊坂 賢次	
看護医療学部	学部長	吉野 肇一	
文学部	日吉主任	坂上 貴之	
経済学部	日吉主任	西尾 修	
法学部	日吉主任	朝吹 亮二	
商学部	日吉主任	小宮 英敏	
医学部	日吉主任	小林 常利	
理工学部	日吉主任	金田 一真澄	
日吉研究室運営委員会	委員長	小湊 昭夫	
日吉メディアセンター	所長	伊藤 行雄	
日吉ITC	所長	秋山 豊子	
日吉キャンパス	事務長	田辺 久夫	
学術フロンティア	研究代表	湯川 武	
語学視聴覚教育研究室	室長	迫村 純男	
環境情報学部	教授	鈴木 佑治	
総合政策学部	教授	重松 淳	
日吉学事センター	事務長	中嶋 孝雄	2002年10月まで
	事務長	富山 優一	2002年11月から
日吉メディアセンター	事務長	平尾 行蔵	2002年10月まで
日吉メディアセンター	事務長	佐藤 和貴	2002年11月から
日吉事務運営サービス	課長	高橋 幸久	

教養研究センター

運営委員会委員（敬称略）

任期：2003年10月1日～2005年9月30日 第2期

教養研究センター	所長	羽田 功
	事務長	宮木 さえみ
	副所長	下村 裕
	副所長	熊倉 敬聡
	副所長	近藤 明彦
文学部	学部長	西村 太良
経済学部	学部長	細田 衛士
法学部	学部長	森 征一
商学部	学部長	桜本 光
医学部	学部長	北島 政樹
理工学部	学部長	稲崎 一郎
総合政策学部	学部長	小島 朋之次
環境情報学部	学部長	熊坂 賢次
看護医療学部	学部長	吉野 肇一
文学部	日吉主任	坂上 貴之
経済学部	日吉主任	羽田 功
法学部	日吉主任	朝吹 亮二
商学部	日吉主任	小宮 英敏
医学部	日吉主任	小林 常利
理工学部	日吉主任	大谷 弘道
日吉研究室運営委員会	委員長	小湊 昭夫
日吉メディアセンター	所長	伊藤 行雄
日吉ITC	所長	秋山 豊子
日吉キャンパス	事務長	田辺 久夫
学術フロンティア	研究代表	湯川 武
外国語教育研究センター	所長	迫村 純男
日吉学事センター	事務長	富山 優一
日吉メディアセンター	事務長	佐藤 和貴
日吉事務運営サービス	課長	高橋 幸久

教養研究センター

コーディネート・オフィス（敬称略）

研究企画ボード

・責任者：羽田 功（所長・経）
 ・コーディネーター：石井 明（経）、小瀧昭夫（経）、境一三（経）、千田大介（経）、太田昭子（法）、木俣 章（法）、鈴木伸一（医）、小菅隼人（理工）、熊倉敬聡（理工）、近藤明彦（体研）、高橋幸久（運営サ）、下村 裕（法、2003.10.1～）、武藤浩史（法、2003.10.1～）、金田一真澄（理工、2004.1.1～）

研究推進セクション

・責任者：近藤明彦（副所長・体研）
 ・コーディネーター：高橋宣也（文）、七字真明（経）、鈴村直樹（経）、千田大介（経）、小林宏充（法）、志村 正（法）、木島伸彦（商）、西川正二（商）、加藤大仁（体研）、市古みどり（日吉メディアセ）、佐野真知子（教養研究セ）
 オブザーバー：境 一三（経）

交流・連携セクション

・責任者：小瀧昭夫（法、2003.9.30まで）
 熊倉敬聡（副所長・理工、2003.10.1～）
 ・コーディネーター：納富信留（文）、石井 明（経）、ガボリオ・マウ（経）、松原彰子（経）、田上竜也（商）、橋本順一（商）、石井達朗（理工）、小菅隼人（理工）、近藤幸夫（理工）、園田陽子（高校、2003.8.1～）、徳竹成之（高校、2003.8.1～）、野津将史（高校、2003.8.1～）、今井英喜（普、2003.6.1～）

広報・発信セクション

・責任者：木俣 章（法、2003.9.30まで）
 下村 裕（副所長・法、2003.10.1～）
 ・コーディネーター：坂田幸子（文）、Knaup, Hans Joachim（経）、松岡和美（経）、篠原俊吾（法）、安田 淳（法）、岩波敦子（理工）、野口和行（体研）、大出 敦（法、2003.7.1～）、鈴木伸一（医、2003.10.1～）

教養研究センター事務局

宮木さえみ（事務長）、宮坂敦子

日吉行事企画委員会（HAPP）

委員長：小菅隼人（理工）
 委員：坂田幸子（文）、石井 明（経）、小瀧昭夫（経）、松原彰子（経）、長沖暁子（経、2003.6.1～）、大久保教宏（法）、佐藤 望（商）、白旗 優（商）、岩波敦子（理

工）、小菅隼人（理工）、石手 靖（体研）、河邊博史（保セ）、田辺久夫（キャンパス事務長）、高橋幸久（運営サ）、木村平和（運営サ）、黒田修正（学事セ、2003.5.31まで）、長田信夫（学事セ、2003.6.1～）、多田重文（学総セ、2003.5.31まで）、藤田忠夫（学総セ、2003.6.1～）、篠塚憲一（学総セ、2003.12.31まで）、服部剛久（学総セ、2004.1.1～）、渡辺知子（学総セ）、佐藤和貴（日吉メディアセ）、小沢ゆかり（日吉メディアセ）、杉田正明（研究室）、庄山則子（語学視聴覚教育研、2003.9.30まで）、山口昌子（外国語教育研究セ、2003.10.1～）

極東証券寄附講座運営委員会

委員長：木俣 章（法）
 委員：斎藤太朗（文）、羽田 功（経）、武藤浩史（法）、木島伸彦（商）、田上竜也（商）、近藤幸夫（理工）、近藤明彦（体研）、河邊博史（保セ）、大西祥平（スポ研）、高橋幸久（運営サ）、黒田修正（学事セ、2003.5.31まで）、富山優一（学事セ、2003.6.1～）、杉山良子（日吉メディアセ）、宮木さえみ（教養研究セ）、小磯勝人（大学出版会）

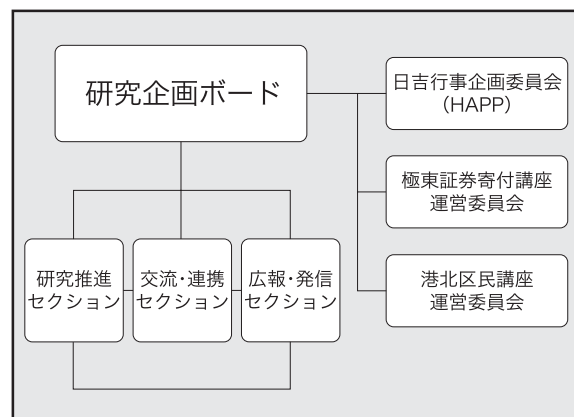
港北区民講座運営委員会

委員長：近藤明彦（体研）
 委員：坂上貴之（日吉主任代表）、大場 茂（文）、鈴村直樹（経）、小野裕剛（法）、種村和史（商）、萩原真一（理工）、鈴木伸一（医）、吉田泰将（体研）、辻岡三南子（保セ）、高橋幸久（運営サ）、宮木さえみ（教養研究セ）

事務局

宮坂敦子（教養研究セ）、恒元晶子（運営サ、2003.5.31まで）、北村悦子（運営サ、2003.6.1～）

コーディネート・オフィス組織図



教養研究センター

所員・研究員(敬称略)

大学教養研究センター所長・副所長・事務長

任期: 2002年7月1日~2003年9月30日

所長: 羽田 功(経済学部教授)

副所長: 小瀧昭夫(経済学部教授) 木俣 章(法学部専任講師) 浅川順子(商学部教授、2003年3月31日まで) 近藤明彦(体育研究所教授、2003年4月1日~)

教養研究センター事務長: 宮木さえみ

任期: 2003年10月1日~2004年9月30日

所長: 羽田 功(経済学部教授)

副所長: 熊倉敬聡(理工学部助教授) 近藤明彦(体育研究所教授) 下村 裕(法学部教授)

教養研究センター事務長: 宮木さえみ

大学教養研究センター所員

専任教員 165名

任期: 2003年4月1日~2005年3月31日

文学部: 足立健次(助教授) 安藤寿康(教授) 和泉雅人(教授) 大場 茂(教授) 大宮勘一郎(助教授) 片木智年(助教授) 金子洋之(助教授) 倉田敬子(教授) 斎藤太郎(助教授) 坂上貴之(教授) 坂田幸子(助教授) 桜井準也(非常勤講師) 高橋宣也(助教授) 高山 博(教授) 中島陽子(教授) 納富信留(助教授) 平田栄一郎(助手) Furnkas, Josef(教授) 前田富士男(教授) 増田直衛(教授) 吉田恭子(助手) 西村太良(教授、2003年5月1日~) 長谷山彰(教授、2003年5月1日~) 辺見葉子(助教授、2003年11月1日~)

経済学部: 厚地 淳(助教授) 石井 明(助教授) 石井康史(助教授) 池田 薫(教授) 伊藤行雄(教授) AINGE, Michael W(助教授) 小瀧昭夫(教授) 柏崎千佳子(助教授) 桂田昌紀(教授) GABORIAUD, Marie(助教授) 河地和子(教授) 岸 由二(教授) 工藤多香子(専任講師) KNAUP, Hans Joachim(教授) 近藤光雄(教授) 境 一三(教授) 佐々木由美(助教授) 七字眞明(教授) 志村明彦(助教授) 杉岡洋子(教授) 鈴木晃仁(助教授) 鈴木五郎(教授) 鈴木亮子(助教授) 鈴木直樹(教授) 千田大介(助教授) 土屋博政(教授) 戸瀬信之(教授) 永井容子(助教授) 長沖暁子(助教授) 西尾 修(教授) 西岡久美子(教授) Notter, David(専任講師) 羽田 功(教授) Batty, Roger(助教授) 光 道隆(教授) 福山欣司

(助教授) 不破有理(教授) 星 浩司(助教授) Ballhatchet, Helen Julia(教授) 松岡和美(助教授) 松原彰子(教授) 宮崎直哉(助教授) 後平 隆(教授、2003年5月1日~) 竹中淑子(教授、2003年5月1日~) 友部謙一(教授、2003年11月1日~) 八嶋由香利(助教授、2003年11月1日~)

法学部: 秋山豊子(教授) 朝吹亮二(教授) 太田昭子(教授) 奥田暁代(助教授) 萱嶋泰成(助手) 金谷信宏(助教授) 木俣 章(専任講師) 久我俊二(教授) 小瀬村誠治(助教授) 小林宏充(助教授) 迫村純男(教授) 篠原俊吾(助教授) 下村 裕(教授) 志村正(専任講師) 鈴木恒男(教授) 鈴木 透(教授) 辻幸夫(教授) 常山菜穂子(助教授) 中矢一義(教授) 安田 淳(助教授) 横山千晶(教授) ジェームズ・M・レイサイド(教授) 小野裕剛(専任講師、2003年5月1日~) マクリン、ニール B(教授、2003年5月1日~) 大出 敦(専任講師、2003年6月1日~) シャーロット、ミハエール(訪問助教授、2003年6月1日~) 武藤浩史(教授、2003年9月1日~) 萩原能久(教授、2003年11月1日~)

商学部: 浅川順子(教授) 朝比奈緑(助教授) 足立典子(助教授) 木島伸彦(助教授) 小宮英敏(教授) 佐藤 望(助教授) 識名章喜(教授) 白旗 優(助教授) 田上竜也(助教授) 種村和史(助教授) 西川正二(専任講師) 橋本順一(教授) 英 知明(助教授) 福沢利彦(助教授) 湯川 武(教授) 横山和加子(教授) 森吉直子(専任講師、2003年5月1日~)

理工学部: 石井達朗(教授) 岩波敦子(助教授) 大谷弘道(教授) 小原京子(助教授) 亀谷幸生(助教授) 金田一真澄(教授) 熊倉敬聡(助教授) 小菅隼人(助教授) 小山信也(助教授、2003年10月31日まで) 近藤幸夫(助教授) 斎藤博昭(専任講師) 坂川博宣(助手) 塩川宇賢(教授) 下村 俊(教授) 楯 辰哉(助手、2004年3月31日まで) 田中孝明(助手) 田村要造(助教授) 仲田 均(教授) 萩原眞一(教授) 北條彰宏(助教授) 星 元紀(教授) 前島 信(教授) 前田吉昭(教授) 松本 緑(助教授) 森 泉(助教授) 森吉仁志(助教授)

医学部: 小林常利(教授) 小町谷尚子(専任講師) 鈴木伸一(専任講師) 鈴木 忠(専任講師) 鈴木由紀

(専任講師) 長井孝紀(教授) 三井隆久(助教授)

環境情報学部: 石崎 俊(教授)

スポーツ医学研究センター: 勝川史憲(専任講師)

保健管理センター: 大野 裕(教授) 西村由貴(専任講師)

体育研究所: 石手 靖(専任講師) 加藤大仁(専任講師) 近藤明彦(教授) 野口和行(専任講師) 村松 憲(助手) 吉田泰将(専任講師)

言語文化研究所: 高橋通男(教授、2003年5月1日~)

高等学校: 大西 章(教諭) 園田陽子(教諭、2003年8月1日~) 徳竹成之(教諭、2003年8月1日~) 野津将史(教諭、2003年8月1日~)

普通部: 太田 弘(教諭) 今井英喜(教諭、2003年6月1日~)

大学教養研究センター兼任研究員

塾外研究者等 39名

任期: 2003年4月1日~2004年3月31日

石橋源士 ライフ・コンセプター

市村操一 東京成徳大学教授

白杵 陽 国立民族学博物館地域研究交流センター
助教授

大堀壽夫 東京大学大学院総合文化研究科言語情報
科学助教授

川口征夫 UK Project[Germany]

佐原徹哉 明治大学政治経済学部専任講師

佐谷眞木人 恵泉女学園大学人文学部日本文化学科
専任講師

妹尾堅一郎 東京大学特任教授

芹沢高志 P3 art and environment ディレクター

中野泰志 東京大学

新田孝彦 北海道大学大学院教授

藤井聖子 東京大学大学院総合文化研究科言語情報
科学助教授

松丸亜希子 P3 art and environment

Matala de Mazza, Ethel ヘルリン文学研究センター研
究員

Ruehl, Joachim ケルン体育大学教授

Vogl, Joseph ヴァイマル大学メディア学部教授

天羽雅昭 群馬大学工学部助教授

伊師英之 横浜市立大学総合理学助手

岩爪道昭 理化学研究所・言語知能研究チーム研究員

大森英樹 東京理科大学工学部数学教室教授

児玉隆治 基礎生物研究所助教授

五味清紀 東京大学数理学部特別研究員

近藤正子 経済学部非常勤講師

菅原ますみ お茶の水女子大学文教育学部助教授

杉原賢彦 映画評論家

高崎金久 京都大学総合人間学部助教授

竹井義次 京都大学数理解析研究所助教授

団まりな 階層生物研究所責任研究員

寺嶋郁二 東京工業大学理工学研究科助手

永島 剛 経済学部非常勤講師

畑 政義 京都大学総合人間学部教授

藤井一幸 横浜市立大学総合理学教授

藤崎 康 映画評論家

古田 幹 東京大学大学院数理学部研究科教授

真島秀行 お茶の水女子大学理学部教授

三輪哲二 京都大学理学部教授

山崎 晋 日本大学理工学部講師

吉岡 朗 東京理科大学理学部教授

坂倉杏介(2004年1月1日~) スケープ・デザイナー

2003年度の主な活動記録

Date	Contents
4	05日 荻野アンナ講演会「フランス語と私」 08日 教養研究センター全体会議 15日 コンサート「春の声」 16日 日吉キャンパス 新任教員へのセンター説明会 25日 学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」中間発表パネル展示会1(入場者300名) ~ 05月17日
5	21日 能楽「葵上」 28日 コンサート「シャンソンの贈り物」
6	04日 小松原庸子講演会 16日~21日 環境週間2003「分煙」 18日 舞踏公演「野の婚礼 新しき友へ」
7	04日 第3回教養研究センターシンポジウム「自然科学系を核とした教養教育」開催(参加者50名) (p.21) 14日 他大学調査:成均館大学校(大韓民国)1名来校 対応1名(p.11) 15日 教養研究センターニューズレター第2号発行(p.14) 15日 ボールゲームフェスタ「フットサル」 31日 教養研究センター「2002年度活動報告書」発行(p.14)
8	19日 オープンキャンパス 学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」 中間発表パネル展示会2
9	20日 横浜市港北区民講座「DNAとナイロンの実験をしてみよう」開催(参加者28名)(p.20, 46) 27日 教養研究センター運営委員会(p.06)
10	01日 実験授業「スタディ・スキルズ」開講「身体/感覚 文化」連携水曜日13回:受講者14名) ~ 2004年01月14日 02日 科学研究費補助金取得勉強会(参加者26名)(p.12) 07日 実験授業「スタディ・スキルズ」開講「生命の魅惑と恐怖」連携水曜日11回:受講者20名) ~ 2004年01月13日 07日 極東証券寄附公開講座「生命の魅惑と恐怖(毎週火曜日 10回)開催(参加者130名) ~ 12月16日 (p.18) 09日 第1回FDセミナー「FDを考える アメリカの授業運営・FD事例の報告」開催 (参加者23名)(p.12) 16日 極東証券寄附公開講座スペシャルエディション 「H・アール・カオス」レクチャー&パフォーマンス開催(入場者350名)(p.19) 30日 第2回FDセミナー「FDを考える 学生による授業評価とFD活動 - シラバスと授業評価・ SFCにおける12年の推移 - 」開催(参加者27名)(p.12)
11	13~14日 <公募企画> Weather map(学生) 26日 第4回教養研究センターシンポジウム「身体知を核とした教養教育の将来」開催(参加者50名) (p.22)
12	1~6日 <公募企画> 彩りの書(職員) 04日 第3回FDセミナー「FDを考える 日本の大学の欠陥を補完する制度・GPA / アドバイザー制」開催(参加者30名)(p.12) 5~6日 <公募企画> 色即是空(学生) 6日 <特別企画> 塾長と日吉の森を歩こう 12日 開かれ行くキャンパス第1回「国際学生懇談会」開催(参加者40名)(p.13) 12~13日 <公募企画> 法学部インテンシブコースドラマ(教員・学生) 19~20日 <公募企画> ARIA(学生)
1	15日 教養研究センターニューズレター第3号発行(p.14) 24日 学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」各プロジェクト報告会開催 (参加者35名) 26日~29日 他大学調査:ソウル大学校(大韓民国)出張1名(p.10)
2	10日 他大学調査:プサン国立大学校(大韓民国)来校14名、対応6名(p.11)
3	08日 2004年度共同研究室利用プロジェクト選定会議(一般研究) 12日 教養研究センター運営委員会(p.06) 23日 2004年度一般研究 研究代表者会議 31日 教養研究センター選書『モノが語る日本の近現代生活 近現代考古学のすすめ』刊行 (p.14)

終わりに

2003年度の活動を振り返って

教養研究センター事務長 宮木 さえみ

昨年度の活動報告書が刊行の運びとなったとき、そのあとがきに、「疾風怒濤の中で業務をこなしてきた」と書いた。「2003年度は、順風満帆、ゆったりと事務局のペースで……」と期待していたが、やはり、疾風怒濤の中での1年間であった。

昨年度に引き続いて、「教養教育の将来」シリーズのシンポジウムが2回開催され、それぞれ、50名程度の参加者があった。また、研究推進セクション主催の連続セミナー「FDを考える」が3回、交流・連携セクション主催のシリーズ「開かれゆくキャンパス」の一環として、「国際学生懇談会 in Hiyoshi」の開催と、矢継ぎ早に、シンポジウム、セミナー、懇談会等が開催され、準備から、当日の運営などを支援した。

広報発信業務として、上記のシンポジウム報告書や「教養研究センター Report」が刊行された。これらの作成を支援し、関係各所に配付するとともに、センターのホームページ上でも閲覧できるようにした。また、所員・研究員の研究成果の一端を学生・社会人に向けて発信するため、「教養研究センター選書」の創刊号が刊行された。原稿の公募から、選定の準備、選定後の出版準備、契約などの業務を行った。

センターのホームページは事務局が作成しているが、所員のアドバイスにより、見やすい形に拡充した。

研究活動としては、懸案となっていた「基盤研究」が本格的にスタートしたため、調査資料の手配などを行った。また、年度の初めには、一般研究プロジェクトの公募が行われ、準備や決定後の部屋割りなどを行った。昨年度に引き続き、他大学調査が行われ、今年度は、ソウル国立大学に所員が派遣され、調査を行った

ため、出張の手配などを行った。

公開講座としては、極東証券寄付公開講座と港北区民講座が開催された。極東証券寄付公開講座は、「生命の魅惑と恐怖」という統一タイトルのもと、昨年度までとは運営方針が大幅に変わり、学生が参加しやすいような総合講座として、秋に10回、開講された。また、スペシャルエディションとして、「H・アール・カオス」の公演も行われた。港北区民講座は、「DNAとナイロンの実験をしてみよう」というテーマで、実験講座が行われた。

センターの特定研究である学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクトの「リベラルアーツ教育の総合モデル構築」プロジェクトが、実験授業として「スタディ・スキルズ」を実施したが、この研究成果を基にして、2004年度にセンター設置授業を立ち上げることになった。このための準備として、センター規程との整合性のチェック、単位化のための各学部へのお願い、大学評議会への案件の提出、稟議書の作成などに忙殺された。

このように業務内容ごとに、1年間を振り返ると、所員の先生方の教養研究に対する情熱と行動力に頭が下がる思いである。また、昨年度と同様、日吉キャンパス事務スタッフを始めとする多くの教職員の支援をいただいたことにも感謝しなければならない。

教養研究センターに対する期待は年々、高くなっており、来年度は、さらに厳しい状況の中での業務になると、事務局はすでに覚悟を決めている。どんな嵐にも負けない、体力づくりを心がけて、新しい年度に臨みたい。

慶應義塾大学教養研究センター

2003年度 活動報告書

2004年7月15日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター

代表者 羽田 功

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL.045-563-1111(代表)

Email lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp

<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>

編集・制作 慶應義塾大学出版会

印刷・製本 (株) 太平印刷社

©2004 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。